

---

# 時報

---

No. 7

1956.1

大阪大学山岳会

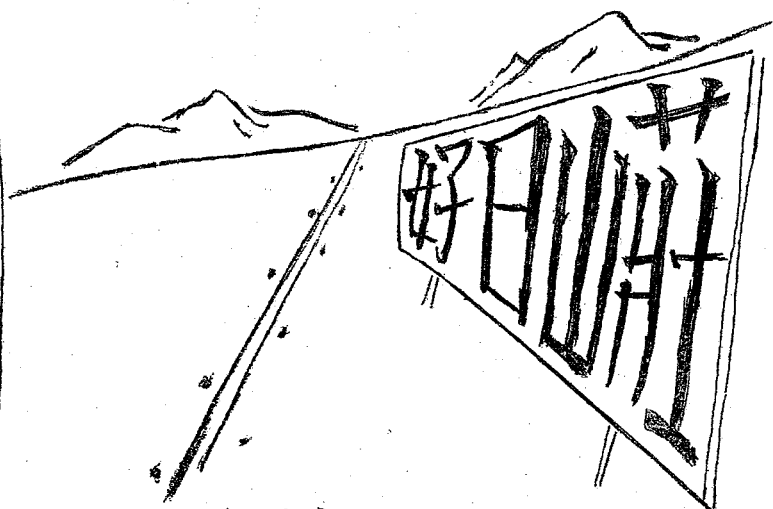
---

日本最古の  
最も新しい登山とスキー用具

専門店

E. Frendo 日本総代理店  
(フランス・シモニー)

札幌・門田作 関西総代理店



大阪店

大阪・北区・堂ビル前・協和銀行ビル・3階

電話 (34) 7745

振替 大阪 68763

東京店 東京・中央区・銀座五ノ五

神戸店 神戸・生田区・三宮一ノ三二一

電話 56-3600

電話 5251



# 時報 第七号 目次

□ 卷頭言	□ 新卒業部員諸兄へ	………	徳永 篤司
□ より高き山へ	——一九五三年度を省みて——	………	川島 勇 (1)
□ 冬山鹿島槍東尾根合宿	………	坪井 圭之助	(8)
□ 春山合宿	………	穴戸 元	(17)
□ 春山合宿食糧報告	………	木村 裕一	(28)
□ ナイロンニ写テント製作報告	………		(31)
□ 山行記	………		(34)
□ 集會記	………		(45)
□ 編集後記	………		(49)
□ 会員名簿	………		(巻末)

# 新卒業部員諸兄へ

徳永篤司

先ず長い現役時代を通じて登山に精進せられて来た諸兄の見事な足蹟に敬意を表し度い。現役時代の登山は困苦しい部の合宿という枠の中に入って決して楽しいというものではない。たまには一シーズン位自分本位のパーティーで山へ、スキーへ行き度いという誘惑に駆られた事もあつたと思ふけれども、それを返けて最後迄一線のパイオニアワークを続けて来た記録は實い。この四月で諸兄はオ一線から退くけれども、本当の山登りはこれから始り、本当の登山家としての生活はこれから始る。楽しい山行——生活の中に融け込んだ——をこれから充分に楽しんで頂き度いと思ふ。社会に出て職を持ち、結婚でもすれば三年や四年全く山と縁が無くなつて了う場合も充分に考えられる。しかし山へ行かない登山家でも良い、仕事の上でも、例えば闘病生活という様なものに於ても登山というものはあるからである。

一方、私達の部も部員の活動に依つて組織が保たれていた初期の時代は了つた。一つの有機的な組織という面から、部は現役とO.B.の二つの下部構造に依つて支えなければならぬ。新入部員が上級部員にスムーズに育ち、適切な登山計画が四季に亘つて持たれるなど、現役の自主的活動が充実して来るに随つて「先輩」の立場と任務が大きくクローズアップされて来るのは当然である。過去に於ける東面各大学山岳部の消長の歴史は私達に「先輩」団の在り方と云うものに就て色々な事を教えてくれた。ある山岳部では毎週の集合のイニシヤキーフを完全に先輩団がとり、昔の華やかな夢を追う雄大な計画がでつち上げられた。現役の一部で弱い非難があつたが大勢は勇ましい方に随つた。しかし実際に山へ出発する間近くになつて例の如く先輩団に故障が繰出し、計画は現役を主として実施され

た。結果は誰の目にも明らかなる如く失敗し、遭難しなかつたのがせめてもの幸という有様であった。計画失敗の後、先輩達は前程熟意をもって集合に出る事はなくなり、その後数年の間、部は沈滞してしまつた。又、別の山岳部の例をとってみよう。威勢の良い若い先輩達が例に依つてヒマラヤを標榜して現役をけしかけた。計画は全て極地法でなければならぬし、装備は全てナイロンでなければならぬ。穂高であらうと剣であらうとそれはどうでも良い。唯、山はヒマラヤに行く爲の道場でしかなくなつた。その部は急に活気に溢れ、忽ち指導的な地位に立ち、内地遠征も成功した。しかし遠征が具體化しないうちに数年経つた。初め鮮かであつたヒマラヤという旗印は次々に色褪せ、最早現役はこのスローゲンの下に鼓舞されなくなつたのである。その部はやがて沈滞し始めた。これ等のイソップ物語は杖拳に暇がない程私達の身近に存在する。とりわけ部を一番そこなうものは遭難の発生である。遭難は避けられ得る、がしかし百%避けて通る事は不可能である。この事は既に幾多の経験を積んだ諸兄は充分認めて居られると思う。私達の山岳部だけが例外と成り得ない以上遭難防止と云ふ事は来る年、来る年誰れもが頭に刻み込んでおかねばならぬ最大の運動方針である。遭難を防ぐ力は実際に働く部員よりも先輩の側にある。この爲に自分は計画を検討してやらねばならぬし、破れたテントを持つて稜線へ上らぬ様に寄附を募つてやらねばならぬ。

要するに、現役の活動にどの程度タッチしてゆくのが良いのかという課題を、論議の上ではなく實際の仕事の面で解決してゆく事が私達の当面の問題となつて来たのである。先輩というものは従属的なものである。卒業して一年も経つて来ると何處の向にか現役に教えて貰い、利戟を受けて動いていける自分というものに氣付くであらう。主体性ある伸びく／＼した山岳部を築き上げる爲に、特に現役と接触の多い新卒業部員諸兄の役割に大きい期待を持つた才である。

(十二月二十二日)

# より高き山へ

## ——一九五三年度を省みて——

川島 勇

こゝ数年未我々が主目標として来たものは積雪季(三月)に於ける後立山の全縦走であつた。

一九五〇年三月、オ一回の計画が立てられたが、新制及旧制学生の学年末試験がずれた爲全部員が集結出来ず、六人のメンバーによつて八方尾根より鹿島槍を往復するに止まつた。翌五年三月には、九名のメンバーによつて針之木より白馬迄の逆縦走が企てられたが、不幸にも針之木岳でアクシデントを起し計画を中止しなければならなかつた。アクシデントを機として計画自体が強く反省され、その結果翌五二年三月には一步退いて、家田リーダー以下八名のパーティーで小日向より杓子——唐松への極地法登山を展開した。この山行は、山行自体としては

特筆すべきものではなかつたけれども、之が我が行つた最初の完全な形の極地法登山であり、我々がこの山行から多くの事を学び取つたと云う点で大きな意義のある山行であつた。翌五三年三月に行われた後立山逆縦走には、この時のメンバーの中、家田リーダーを除く七名が参加して各々重要な役割を果し、計画を成功に導いたのである。

私が、予期していなかつたにも拘らずチーフリーダーになつたのは、こうして一応問題が解決された直後であつた。喜びと虚脱感が我々の心を占め、一方に於ては或種の解放感があつた。今迄の我々には嚴然とした主目標というものがあつた。それは、いはゞ物心ついた時から既に存在したものであつて、半ば義務づけられた目標であつた。解放感というのもそういう所から出て来たものであつた。しかし、次に我々は何をすればよいのか、突然開けた眼の前の広さに戸惑を覚えたのである。

より高き山、より困難なる山、未知なる山への憧憬と努力ことは私自身の登山の本質をなすものであり、私を困難な登攀に駆りたてる原動力であつた。一寸した危の弛みが決定的な致命傷になる様な烈しい登攀にあつても、その一瞬一瞬が私にとつては喜びであり、未知の山稜や溪谷を、前途に対する不安と処女地を行く楽しさを味ゆいつゝ進む時も、同じ喜びを感じていられた。

旅年の私にとつてより高き山とは冬の主稜線を意味していらた。そして又、春の主稜線上での行動に自信を得、南ア及中アで冬の稜線を味つていた我々が、次に進むべき道も冬の主稜線であつた。こういう論理的帰結の他に、私を強く冬の稜線に魅きつけたものは、北岳や木曾駒で味つたあの美しくも荒涼たる冬の稜線の持つ強烈な魅力であつた。寒気、風、冷やかな太陽。普通の人間にとつて一つとしてよい所のない冬の稜線の、どこに私を魅きつける力があるのだ

らうか。しかし、そこには純粹で峻烈な自然があり、我々がすべてを忘れて全力を投入出来る何物か々あつた。

ときれ、リーダー会は私の考えを容れて、例年になく冬山に主力を注ぐ事になつた。合宿地としては、冬の休暇が短いという関係もあつて天候の比較的良い徳高、聖赤石、鋸岳及中アが候補地として挙げられたが、夏山迄に決定する事は出来なかつた。

夏山合宿も問題であつた。従来我々の夏山合宿は、偵察を兼ねてその年度の主標たる春山合宿に関連した場所で行われるのが普通であつた。所が昨年は、主目標が冬の主稜線と云うだけで山そのものは未定であつた。一方私自身は、合宿地を徳高とか劔という人並な所へ持つて行きたいと考えていた。カクネ里、こう云う所での生活は確かに素晴らしい。巨大な雪溪とそれを囲む岩壁山稜は我々だけのものであつた。誰に気兼ねなく登り、滑り、食ひ、眠つた。人間の踏跡

の全然ついていない山後は、緊張した登攀を要  
求したけれども、それはむしろ快いものであつ  
た。こうした所での合宿は、新人のトレニーニ  
グには不向であるが、登山の本質的要素を多分  
に持つて居り、それ自体決して悪くはない。し  
かしこういう所だけを知っていて、人々がオー  
ソドックスな夏の合宿地と考える穂高や朝を  
知らないので、偏食の誹りは免れない。こうし  
て考えから、私が曾て眞砂沢合宿に参加した経  
験のある事と与つて、夏山は朝合宿と定つたの  
である。近末稀な大雨に遇つて予定通りには行  
かなかつたけれども、基礎的技術及体力の練磨、  
部員相互間の理解と親密の度を深める事、及將  
来の山行に備えての偵察と云つ夏山谷宿の目的  
は達せられたと考へている。

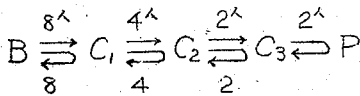
冬山が穂高と決つたのは夏山が済んでからで  
あつた。我々は穂高をよく知らない。しかし先  
人のトレースは至る所に印されて居り、穂高に  
関する文献は非常に多い。我々は文献によつて

得ただけの智識でどれ程の山行が出来るか、自  
らの力を試そうとしたのである。我々の條件は  
製衣予定のナイロンテントを念めて四人用テン  
ト四張、二週間の日数、及十四五人のメンバー  
であつた。但しこの中、稜線上で行動出来るも  
のは八人位であつた。

三回に亘る秋の偵察と荷上その後、上高地から  
天狗のゴルを経て槍岳迄足を伸ばす計画に最も  
魅力を感じ、之に検討を加えた。従来記録に  
従えば、上高地にBH、岳川の奥にBCを設け、こ  
こから天狗のゴルにC<sub>1</sub>、奥穂にC<sub>2</sub>、北穂辺りに  
C<sub>3</sub>とテントを進め、更に碓氷に行こうとすれば  
南岳辺りにC<sub>4</sub>を作らねばなるまい。之がポーラ  
ーとしての常道の様である。しかし日数、裝備  
入眞の点で多くの制限を受けていた我々はこの  
まゝの方式を採用するわけにはゆかなかつた。  
我々にとつてポーラーは目的ではなくて一つの  
手段であつた。そして、登山がスポーツである  
以上登行速度も亦重要な要素になつて来る。同



一の山でも、同程度以上の安全性の下により早い登行速度で登らうとするならば、それはより高き山への道に通ずるといふ考えの下に独自の方式を採用したのである。一体テントを進めてゆく目的は、安全確保にしかも速やかにアタック隊を最前進キャンプに送り込む事にある。極端に云うならば、アタック隊が最前進キャンプで生活し、攻撃し、下山するに必要なる食料装備等を荷上げしこえすれば、アタック隊以外は下



輿穩  $C_2$

山してもよい。今上図の加き極く單純なキャンプの進め方を考えると、キャンプ数と同じ行動日数で攻撃可能になるわけである。我々はこの考えに基いてキャンプ位置及ポツカ量を検討した結果、適當なる員配置をすれば、前述した我々の條件の下に上高地より槍岳を攻撃し得る可能性を見出したのである。即上高地をBHとし、天狗のゴル  $C_1$ 、北穂  $C_3$  と一日に一キャンプづつ前進さ

せるならば、穂岳の天候から考えて二週間あれば十分と見たのである。この場合問題になるのは、BHより  $C_1$  へのポツカ、 $C_1$ 、 $C_2$  間のフィクス、及  $C_3$  よりの最終攻撃であった。

岳川にBCを設けないで、いきなり天狗のゴルに  $C_1$  を設ける様な例は今迄にない。が、サポート及中継デポを利用すれば決して出来ない事はなく且計画上有利であると考へた。我々の考へによれば、キャンプを四個以上連続して伸ばす事は各キャンプ間の連絡及ポツカ量の急激な増加と云う点からみて好ましくない。我々は天狗のゴルを境として山行を二段階に分け計画を單純化した。オ一段階の上高知から天狗のゴル迄は、中継デポとサポートの援助によつて一挙に百貫の荷を上げる。この場合、一人のポツカ量を五貫としてスピードに重きをおいている。 $C_1$  へのポツカが完了してからオ二段階に入り、3つのキャンプと、8人のメンバーで3・2・3のフォーメーションのボーラーを行う訳である。

フィクスについては技術的及時間的尙題についてかなりの不妥があつた。もし之に手回取るなら計画は挫折するし、手を抜いてアクシデントを起せばそれこそ取返しがかない。特にC<sub>1</sub>C<sub>2</sub>間は通過回数が多いから注意しなければならなかつた。

C<sub>1</sub>の奪取とC<sub>1</sub>C<sub>2</sub>間のフィクスが全計画の重大な山をなすものであると云う考えから先発隊を出したけれども、之は考え方が甘過ぎた。先発隊は天狗のゴルにも達しなかつたのである。

最後の北穂のC<sub>3</sub>から槍岳を攻撃することは無理とは云えぬ迄も困難は予想されたが、之以上テントを進める事は出来なかつた相談であつたから強行した訳である。攻撃メンバーとして尾藤と私自身を選んだのは、この様なラッシュを行うに最も適したメンバーであると考えたからに他ならぬ。どちらか一人は後に残るべきリーダーが、二人共前線に出る事は良い方法ではなかつたけれども、最終攻撃をより重要視する以上

こうせざるを得なかつた。強力な最終攻撃を行わぬ。又は行い得ないポーターは、ポーターの目的が十分な攻撃能力を持つたパーティーを最前進キャンプに送り込む事にあるのを忘れている。穂高近辺の記録の中には間々見られる事である。

この様に我々の計画はざり／＼のものであつたから、ポツカ量を少くする爲種々の方法を講じている。食料計画は無駄のない様に綿密に組立てられた爲、計画終了後は余剰食料は殆んど無い程であつた。特に装備については、C<sub>3</sub>にナイロンテント及エアマットを用ひ、又四百米近いフィクスには十二耗の他に八耗、五耗のザイルを使用する等して不必要な重量を減らした。かかる努力によつてなされたポツカ量の減少こそこの計画を可能ならしめたものである。必要な装備を入手する爲の資金集めも、戦後途絶えていたOBとの連絡をとる事から始めねばならなかつたから厄介な仕事であつたが、幸、先輩諸

二のつ

氏の理解ある御援助によつてうまく行った事は全く有難いことであつた。

こうして冬山が始められた。

悪天候の爲先発隊が十分行動出来なかつた事。C<sub>1</sub>へのボツカの不手際な事。C<sub>1</sub>での盲腸患者。C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>間フイクス作業の遅延。C<sub>2</sub>の潰滅。アタック隊のヒバーク。風雪中のC<sub>3</sub>撤收と凍傷等多くのトラブルが生じたけれども幸に切抜ける事が出来たのは、隊員の頑張りにあつた事は勿論であるが、多くの点で運がよかつた事も否めない。

冬山が終つた時、我々はたゞ全力を盡したと云う感があるばかりであつた。そして行動中常に我々を脅していたものは、机の上では巧妙に立てられた計画が、雪の状態については未知であり、又我々に不馴れた岩場の多いルートで果してうまく行くかどうかという不安であつた。結果としては曲りなりにうまく行つた訳であるが、この様な山行がいつも成功するとは決して云えないし、又良い方法であるとも云う事は

出来た。たゞ之は山の條件と我々の条件の妥協点をぎり／＼迄追求した結果見出された方法であり、やり方によつては登行速度を上げ得る事を示したものである。そして軽量のテント・ザイル等の出現によつてこの傾向は益々強められて行くという事は云えるのであるまいか。

冬山直后には、あまりにも強烈であつた山行の思出が生々しい爲に、春山は新人のトレーニング程度の山行をど考えていたが、日が経つにつれて再び未知なる領域を求めると烈しい登高意欲が起り、前々から話のあつた黒部へ入る事になつた。黒部の横断は仙人ガムの所で行つのが普通であるが、我々は昨夏の偵察の際に僅かに可能性を見出した下の廊下での横断を目論んでのである。実際には計画の不備、メンバーの不平等によつて偵察程度に終つたが之は当然の事かも知れない。たゞ之が手掛りとなつて今后黒部へ入る気運でも開ければ目的は達すると考えられている。

過去を振り返つてみる時、我々は先人の残した  
手掛り足掛りを基としてより高き山への道を歩  
んで来た事を知る。そして一つの学校山岳部に  
於てその生命は、常により高き山への努力によ  
つて維持され、かゝる努力の結果積重ねられた  
経験はやがて伝統となり、その部に所属する者  
がすべて染まる一つのカラーを形成して行く事  
が分るのである。阪天山岳会が、古い母体から  
新しい意義を持つて結成されてから既に五年  
もはや一つのカラーが出来上つゝある。もしこの  
カラーに單に安住するだけならば、それは次  
に色褪せたものになつてしまふ。伝統を打破し  
カラーを塗りかえようとする意志と努力こそ、  
カラーに深みと鮮明さを与えるものである事を  
忘れてはならない。

(終)



# 冬山鹿島槍東尾根合宿

(一九五四年)

坪井圭之助

一九五五年春に懸案の黒部横断剣往復のポータをひかえて、この今迄にない大規模のポータの実施に対して、我々の冬山の経験は一部上級部員に限られてゐた。特にこの春山には大人数の完全なポッカが成巧の條件であつたし、又このポッカに下級部員を使用するとすると、当然こゝに強力な中監が必要になつて来た。このため特に荷上、高所露営に重点を置いたトレーニングを目的とした冬山が計画されるに到つた。

## 計画

春山に主眼が置かれていたため冬山は直前まで未決定でままつたのは一二月に入つてからであつた。今回の山行の目的から去つて大規模の

バリエーションは考へられず、どの尾根を対称とするかで種々議論された。後立東面各尾根と八ヶ岳と考へられたが、結局所帯日嶽、アプロ一十、尾根のレベル、キヤムプが二三箇所設置し得る等の点と、更に白馬主稜に始まつた一連の後立に於ける我々の登攀の最後に残された尾根として鹿島東尾根が決定された。しかしながら尾根が決められた後になつて問題となつたのは、一体どこへ登頂するかと云うことであつた。實より東尾根そのもの即鹿島槍往復はこの方式では満足出来ないし、ざりとて爺は遠く且低い、五竜はギレットと距離の点で考へざるを得なかつたが、結局問題となるオウキヤムプの位置が北槍頂上ならば五竜往復も可能と考へ之を主とし、C3の如何により南槍又はギレットの往復に終るも止むなしと結論した。けれどオー、オ二両岩峰の通過が文献に於いても荷上の形では全く未知であつたからである。

従来この尾根はラッシュの対称とされて居た

けれども、我々は之を国境後線への定場と考えたわけ、従つて雪崩をさけるためにも完全に末端よりトレースしオー、オニ岩峯も直登する事にしたのである。

具体的には一二月下旬の偵察により、B.Hを冷沢―大川沢出合(一〇八〇)とし、C1を二八〇〇米附近、C2をオニ岩峯直下(二三七〇)、C3を荒沢頭(二七〇)より北槍(二八三〇)間に設置することにし、オー、オニ岩峯はボツカのためザイル固定を行うことにした。パーティ編成は3名づつ3隊に分けアタック隊を先頭に後続隊は一キヤムプづつ後れて前進、アタックはC3(三名)、C2(六名)同時に出発、各々五竜、南槍往復することにした。キヤムプは全部テントによることにし、ナイロン一、二号大高テントを用いた。

計画日数については、後線に於けるアタックは四日の内一日は晴があると判断し、四日計上、栗尾根上部に於ける行動日は二日の内一日は必

ず行動し得ると考え正味全日数八日に対し最大一四日とした。

大要以上の如く計画し、一、キヤムプ運管の迅速化、二食糧、パツキング、荷上の合理化を主眼として実施した。

参考文献としては関西学研、神大、法政、立教、鵬翔、岳人の報告を参考にした。

尚栗尾根上部の地形については陸地測量部のもの又各文献の地図共全く相互関係高ご等はデタラメであるため寫眞、スケッチを参考にして之を判断した。

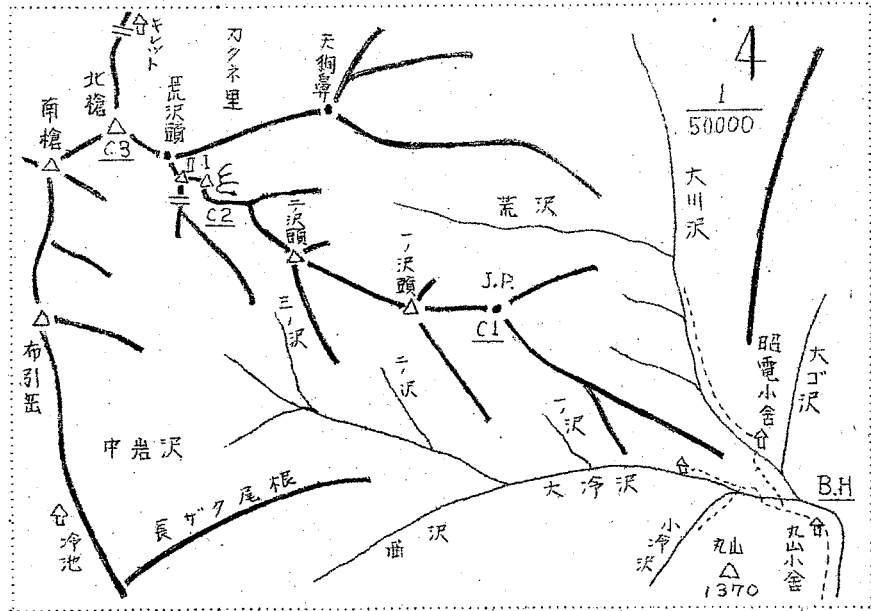
## メンバー

坪井至之助(心)、広橋茂(金計)、三枝礼子(記録)、  
木村祐一、李中勝、鷺沢忍、関本靖治(裝備)、  
山本進一郎(食糧)、川島勇(O.B.)

## 行動記録

一二月二五日(晴) (先大町―大川沢出合) 照堂小舎

鹿島槍東面、東尾根概念圖



先登隊、広橋、李中、大町着、午后鹿島入、  
本隊大阪発。

一二月二六日(晴后曇后小曇)

本隊大町着バスで源汲へ、ばかに荷物が多いので源汲へ二往復、昭電小舎使用不能のため、丸山小舎に入る。積雪三尺。

一二月二七日(雪) 本隊、小舎(二〇〇)

一(テボ(四二〇)——小舎(五三〇)。木村、鷺沢(一三〇)着、鹿島往復。川島先輩(八三〇着)。

丸山小舎が満員で向ひの飯場に午前中移動、午後復察兼ボツカに一四〇〇米附近まで登る。

登路は大冷沢昭電取入口の手前より右手の土堤を越え沢をつめる。登り切ると平坦な台地になり、こゝより尾根に平行に高度を高め暫くして右折約一時間で尾根に出た。我々は太いにラッセルを予期したのであるけれども、四五日前に京大岡坂君のパーティが通過した後で殆んどラッセルもななくトレース出来た。夜食糧計算の結果砂糖不足の爲、明朝三枚糎

に大町へ買出しに行つてもらうことにする。  
九崎川島先輩著全員集結。

一二月二八日(晴)

BH(八・〇〇)——テポ点(二・〇〇〇)——C1(二・三〇〇)

C1建設に快晴の中を出発、テポ点より上は本格的ラッセルになつた。一八〇〇米、尾根が急に広くなつた当り、森林中にC1設営、一号と大高デントを入口を向合せに張る。之は全く都合が良い。連絡出来ると尚良いのだが。関本、広橋をBHに帰し残りは再びテポ往復、坪井、木村、山本、至中、鷺沢、川島C1に入る。

一二月二九日(晴后雪)

C1六名 C1(八・〇〇)——C2(二・〇〇)

山本、鷺沢、川島、C2(二・三〇)——C1(五・三〇)

BH3名 BH(二・〇〇)——C1(三・〇〇)

朝やけで午后のくすねを予想させたが、一気にC2建設せんものと出発。一の沢頭の手前や尾根になつた所で始めてオ一、オニ岩峯なるものに見参、その圧倒的な高さで傾斜に一驚し

た。一の沢頭二の沢頭間はほとんど雪尻は発達して居らず、木株にワカンを取らぬながらも杖論に通過、途中のコブで京大パーティを抜く。

二の沢頭附近より天候くづれ始めたのでピッチを上げ荒沢尾根分岐点で昼食、ここより完全にトレースなく更に天候益々悪化猛風雪になり始めたため、坪井、木村のみ荷物を持ち、残りはテポラッセル隊を編成、目の前の小岩壁を尻にまさ完全な雪のナイフリッジを一九となつて突破、オ一岩峯直下C2予定地に坪井、木村がリッジの曲角に斜面をけづつてナイロン2号設営、残りは再びテポ往復、坪井、木村、至中C2に入り残りは又吹きすさぶ風雪の中をC1へ下つた。一方BHより関本、広橋、三枝C1へ入る。

一二月三〇日(風雪)

C2三名 停滞。

C1六名 C1(二・〇〇〇)——C2(四・三〇)

内、関本、広橋、鷺沢、C2(四・四〇)——C1(七・三〇)  
C2は風雪のため停滞、C1六名は雪の中を



C2へ移動を敢行し夕刻C2着。川島、三枝、山本C2へ入り、関本、広橋、鷲沢再びC1へ下る。

一月三十一日(曇后雪)

今日は岩峯のザイル固定と決めのんびりかまえていたら早朝より、九大、京大パーテイ、キヤムプ前を通過、あわてて飛び出したが何しろせまい尾根の事で順番をまつ始末。旧帝大三校が一尾根に会すとは珍しい事だ。

東尾根のナイフリツ子ガオ一岩峯の南大斜面に直角に交はる点の東側5米位に荒沢へ落ちるルンゼを京大の荷物つり上げを左に見て木村が約六〇米ザイルをカンバの木に固定し、之を登り切った後はオ一岩峯頂上まで広大な雪の斜面を直登、雪がしまつて居らず非常に苦しむ。オ一、オニの間のコルで九大隊に追いついたが、其の頃より天気くずれ始め雪がちらつき出した。ここより先は細い岩尾根が約四十米ゆるやかに続き更に約三十米の岩壁となつてオニ岩峯を形

している。下部の岩稜に四十米固定し、更に上部は直登が不能のため、せまいテラスを左に六七米移動、小さなガリを越え、斜下につき出た一枚岩の下端を空中にのり出す様にして回り一枚岩の上に出たが益々激しくなる吹雪に思うにまかせず、三〇米固定して荷上げも短時間で通過し得る見通しを得て荷物はコルに置きC2へ帰った。C1関本、広橋、鷲沢C2着。これで全員C2に再び集結、明日は全員でC3建設に向うことにする。

一月一日(雪)

C2(八・三〇)―オニ岩峯(二・三〇)―北檜頂上C3(二・四五)。サポート隊C3(一・三〇)―C2(四・〇〇)。

昨日の見通しもあり天気は良くなかつたけれども、とにかくオニ岩峯を越すことにして出発。オ一岩峯は何なく越せたが、オニは以外に手回取り、後はただ登るほど強くなる吹雪の中を先頭のラッセルに従う。全くどの辺に居るかさっ

ぱり分らない。一段と急斜面を登り切った所で  
見覚えある北檜頂上に出た。折から我々を祝福  
するかの様にかスの固から五竜と剣が顔を見せ  
た。

風の中で大至急晝食をすませ、頂上のはゞ真  
中に新鋭ナイロンニ号をはる。雪が固まらない  
ため張線がはりにくい。設営后サポート隊は明  
日の成功を約してC2へとガスの中へ姿を消し  
た。

一方後に残ったC3隊はテント整備を全中  
まかせ、坪井、木村キレット偵察にすぐ出発、  
一度コルへ降り夏道通りトレース、キレットの  
入口は簡単に発見、針金を出してキレットへ、  
小舎まで行くつもりで北側の岩壁を登り始めた  
が又天気が悪化しさうなので上部のピトンに補  
助ガイルを固定、大急ぎでうす暗いキレットを  
抜け出し走る様にC3に帰った。途中より猛烈  
な吹雪になり、北檜のすぐ下で二三度迷ってや  
うやくC3に飛込んだ。

所がテントの中とは云へこの後立の風にはナ  
イロンテントも無打だった。やはり防風壁を依  
るべきだったか、ラジウスをいくらつけても全  
然暖くならない。おまけにシラフがぬれてい  
るとあつては全くすばらしい元旦の夜だった。

一月二日(風雪) C3、C2共停滞。

相変らずの吹雪。テントの黄色い布地はどう  
も具合が悪い、何時見ても外が明るく陽がさし  
ている様に見えごまかされる事甚しい。

晝すぎシラフを乾かすためラジウスを点火中  
過熱のため安全弁のハンドが融けて使用不能に  
なった。全中が頭をしばったがなほす方法がな  
い。全く予期しない事ではあつたが萬事キユー  
すである。一日や二日ならこのままで細々と行  
けるが只でさへも悪し条件で更にラジウスがな  
いとなると之は考えざるを得なかつた。起つた  
事は小さかつたけれども、その影響は甚大であ  
つた。全く心臓を止められた様なものだ。我々  
は計画を放棄して明日下りぬばならない。C2

より川島先輩、三枝、山本、下山。

一月三日（風雪）

C3隊C3(2000)―C2(2100)。C2停滞。

夜が明けても風雪は一向衰へてない様だ。今日も恐らくC2からの連絡はないだろう。火がないので恐しく寒い。心残りながら巻を決して撤収開始。何も見えな。テントの支柱が凍って抜けないので、そのままリュックの上のせ全くトレースの消えた尾根を睥までもぐりながら下りる。オニ岩峯を慎重に下り、こゝより凍傷にかかりかけた空中を先行させ、C2隊を呼びにやる。残りでザイルを回収、雪崩の出さうなオニ岩峯の南斜面をゆっくり下り、出て来たC2隊に下のザイルを頼みC2に入った。夜は帰着祝で盛大にゴキッし、スし振りのラジオのオトミさんに正月気分をひたる。あの寒々とした、すべてがぬれて凍ったC3に比べるとまるで天国の様に感じられた。

一月四日（快晴曇）

C2(2100)―BH(5000)。

夜半一二時すぎより吹き出した風は物凄かつた。短いインターバルを置き、一瞬地鳴の如き前奏と共に襲い来る風に対して我々は全く風前の灯そのものであった。支柱は波の様にゆれ、布地は風船の如くふくらんだ。半所間位で先づナイロン一号の支柱折れ、テントにほれ、続いて二号もペグが抜け倒された。恐らく瞬間風速三、四十米位はあったであらうか。只皆支柱をかかえて風の止むのを待つのみだった。四時すぎ風おさまる。

夜が明ければ全くの快晴、今はもう二度アタックの望全くなく、寐不足の眼をこすりながらのんびりと撤収準備、ひる前C2衆、往きのラッセルの固められたバーンは夜来の風のため反対に雪面より飛び出し、アイゼンを快適に効かして存分に後立を眺めながら、途中C1のテン

ト撤收、往きと異なり取入口の上  
手に出る小ルンゼを半分滑りなが  
ら下り、夕刻BHに入った。

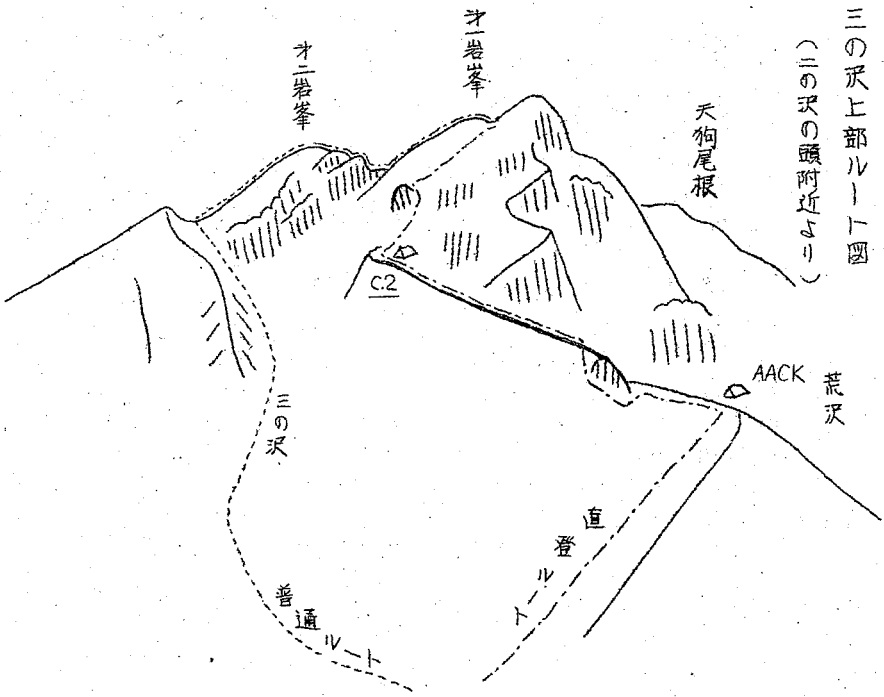
一月五日（雪）

BH（ハ・〇〇）——鹿島——大町。

小雪の中をスキーを引張つて鹿

島へ、トラックで大町へ出た。

三の沢上部ルート図  
（二の沢の頭附近より）



# 東尾根行動表

大鹿出B.H. C.1. C.2. オニ岩峯下 C.3. 北橋 五  
町 島合 1080 1800 2370 2830 電

12月 25日 曇	2 →					
26日 小雪	4 → → → →	1400				本隊出合着
27日 雪	2 → 1 →	5 →				1400 テポ
28日 晴	1 →	6 →	2 →		オニ 岩 峯	C.1 建 6人入ル
29日 晴后 風雪		3 →	3 → 3 → 3 →			C.2 建
30日 風雪			3 → 3 → 3 →	3 →		キ レ ッ ト
31日 曇 厚雪			3 →	6 →		オニ岩峯往復 サイクルスワッグ入
1月 1日 雪				3 → 6 ←	2 →	C.3 建 キレット サイクルスワッグ入
2日 風雪	←		3 →	停	停	ラジウスコフレル 3名下山
3日 風雪				← 停	3 →	C.3 撤収
4日 晴		←	6 →			C.2, C.1 撤収
5日 雪	← 6 →					

# 春山合宿

穴戸元

まえがき

後立から春の黒部へという、我々の願望は年と共に高まっていった。昨春冠松次郎氏の記録を頼りに、新越沢を下り、黒部を横断しようと考えたのは、今にして思えば、余りにも容易な計画であり、黒部の急流を樹間にわずかに望見するのみで敗退したのは、むしろ当然のことであつた。

そこで五年の我々の課題は、

- (一) 後立山から黒部への最良のルートであり、
- (二) 横断地点並びにその方法
- (三) 横断後に通過する内蔵助沢の偵察である。

これらの解決のため夏一回（上尾藤0B）、秋二回（上穴戸、上坪井）の偵察隊を出し、その

結果、

(一) 嘯沢尾根を使用する。

(二) 嘯沢出合の吊越を使用する。もし不能なら樹を切つて橋をかける。

(三) 横から出る雪崩さえ注意すれば、本谷自体雪崩れることは考えられないが、行動は夜間に限る。

という結論に達し、秋には全ルートのトレースを行い、吊越には補助ガイルをフィックスするなど、一応は問題は解決出来たものとしたが、こゝに大きなミスが潜んでいたわけである。

春山に際しては、今年のメンバーから考えて、昨年の横断計画を弔往復に計画を拡張した。そこでBCと五つの前進キャンプを進めていくに当り、複雑化を避けるために、黒部までのサポーター隊とそれより先のアタック隊に分け、サポーター隊は横断地点にアドバンスBC（ABC）の建設に全力を傾け、その後はアタック隊（五名）独力でアタック撤収をすることとし、又、根拠地か

ら長いポーターを展開するために、速かに、且つ円滑にABC建設（四〇貫の荷上げ）を完了する必要がある。それ故、

(一)可能な限りサポート隊の人員を増し、アタック隊は少数精鋭とする。

(二)従来必要性を痛感しながら、実行しえなかつた食糧の梱包を完全にし、ホツカを円滑にする。

ABC設置まで長期間綱えつるよう荷上げするが、必要の場合サポート隊を下しせしめ、C<sub>2</sub>からでもアタック隊独力で行動可能にする。

以上のような要旨によつて計画を樹てた。

### 計画

○アタック隊

穴戸 元(CL) 木村裕一(SL 食) 坪井圭之助

(西川元夫(装) 尾藤昭二(OB))

○サポート隊

木村裕一(L) 西川元夫 三枝礼子

山本進一郎 四方大中 岡田博司

寺田満洲郎 村瀬泰弘 和田

乗 雍(OB)

◇アタック隊の任務

ABC建設後

I ABC——内蔵之助平(C<sub>4</sub>)

II 内蔵之助平——ハシゴ段乗越(C<sub>5</sub>)

(真砂沢までの偵察)

III アタック (長次郎谷をつめて)

IV C<sub>5</sub>、C<sub>4</sub>撤収 ABCに戻る

V ABC撤収 C<sub>1</sub>に戻る

VI C<sub>1</sub>撤収 BHに戻る

◇サポート隊の任務

大沢小屋をBHとして、ABCを建設し、C<sub>1</sub>にアタック隊用帰途食糧をデポし、C<sub>2</sub> C<sub>1</sub> BCを撤収する。

行動記録

三月一八日

実に繁雑極りない最後の梱包をすませ、サポ  
ート隊才一隊（西川、岡田、寺田、村瀬、和田、  
東OB）は午後大町発。初め予定していた黒沢小  
屋は管轄署の人夫がはいっているので使用出来  
ず、寄沢の飯場小屋迄ホツカする。麓川林道は  
雪融けで、大出からは車も轍も使用出来ぬ悪條  
件のため、予定通り荷上げ出来ず、全員寄沢泊。

三月一九日（雨）

つめたい雨にすぶぬれになりながら泥沼と化  
した道を、大出寄沢間二往復のホツカ。実に長  
く感じられる道である。西川、東OBは午後より  
肩沢出合少し下手まで偵察を兼ねて、ホツカし  
テホしてくる。黒沢からは全く雪に蔽れてい  
て歩きやすい。寄沢までのホツカ完了。

三月二〇日（雨）

豪雨をういて大沢小屋（BH）までの才一回ホツ  
カ。木村、三枝、山本昨夕大町発でサポート隊  
才一隊に合流する。

三月二一日（雨のち曇）

三日目の雨は停滞、皆の顔がほころぶ。東OB  
山本は連絡の手遣いで不利などがホツカする筈  
の荷物が大町に取残されたため、取りに行くが、  
途中、大出で自動車で荷物を運んで来て穴戸と  
連絡がうぎ、三名で寄沢までホツカ。全員十一  
名寄沢小屋に合流する。

三月二二日（晴のち曇）

二日の遅れを取もどすべく、大馬好をかける。  
全員で大沢小屋までのホツカを完了するが、天  
候は少しも回復の徴がない。しかし後立山縦走  
以来三度訪れる大沢小屋になつかしさかわりて  
くる。小屋の中の雪も処理され、居心持のよく  
なつた小屋から、明るいつ話声が針の不谷に響き  
渡っていく。

三月二三日（小雪）

雪が降ってはいるが明るく、視界もさ々、小  
屋の前に出ると、若小屋沢岳の稜線が望見出来  
る程である。行動か、停滞か、一審判断に迷う  
いやな天気である。兎に角、登りうるところまで



でボツカをしておくに越したことはないと思ひ、予定通り出発する。BCの位置は一昧春の後立逆縦走の時の新越雪洞地点（時報5号参照）にする。緩傾斜で風雪によりすべ雪洞の入口が埋没する危険性があり、それで一昧春もにがい経験をしたのだが、他にそれ以上の候補地がないので止むを得ない。ラッセルに時間を喰ってBC到着が遅れたのでデポ用の小さな雪洞をほる。その向雪に風も加つて禾尾ので木村、三枝、山本村瀬、岡田、四方、寺田、和田、東OBを下山させ、穴戸、西川は風雪の中かなりの苦心を払つてナイロンニ号テントを張る。なほこの日坪井、尾藤OB大町より大沢小屋にはいる。

三月二四日（快晴）

久し振りに見る青空。BCの二人は夢中でシャッターを切る。剣、立山、遠く日本海も見える。信州側は一面の雪海で、その上に針木、蘆葦が浮き出ている。穴戸、西川は予定に従ひ、C<sub>1</sub>までのトレース。鳴沢のトラバースは古い雪と新雪

がなじんでいず緊張を要す。

木村、三枝、山本、四方、岡田、村瀬BCにはいる。尾藤OB、東OB、坪井、和田BC往復BHに帰る。和田停滞。

三月二五日（風雪のちガス）

停滞。たゞしBHの五名はBCに上る。これで全員BCに揃う。

三月二六日（晴時々ガス）

風のつめたい日である。全員でC<sub>1</sub>までボツカ、穴戸、西川、山本はC<sub>2</sub>に進み、他はBCに帰る。カポト隊員とは大阪までさようならだ。

三月二七日（快晴）

C<sub>2</sub>の三人は真近に見える黒部別山、その下に白く光つて岩と岩との間を流れている黒部にテントを出るなり眼を奪れる。しかも今日は、その待望の積雪期の黒部の河原に降り立つことの出来る日だ。鳴沢尾根の末端から鳴沢に降る傾斜は、高度が下つたためか腐つた雪に極まされ、それに加えて密生した樹林帯、このためしばし

はルート上の判断を誤らされる。偵察隊のつげは  
鉦目を発見してホットする。午後〇時鳴沢出合  
に着く。吊越は滑車が対岸の雪に埋って商軍に  
動きそうでもない。何かしら心も重くC<sub>2</sub>に帰る。  
東OB、村瀬、岡田、四方、寺田はBCよりC<sub>1</sub>には  
いる。尾藤OB、木村、坪井はBCよりC<sub>2</sub>、三枝、  
和田はBCより大町に下山する。

三月二十八日（C<sub>1</sub>…風雪、C<sub>2</sub>…雨）

停滞。

三月二十九日（快晴）

山本が單身C<sub>1</sub>に引返し、C<sub>2</sub>には実戸、木村、  
西川、坪井、尾藤OBの五名だけとなったためか  
幾らかリーダーの重責も軽くなったようは気にな  
つたのが間違いだ。朝は早出を原則とする。山  
の戒律が破られ出発したのは九時を過ぎ  
ていた。もつとも昨日の朝でぬれた物を乾した  
り、今日明日の二回に分けてポツカする荷分け  
のために困つたのも事実だつたのだが……。  
尾根末端の特長のある馬の背様の岩（これを我

我は馬の背と呼んでゐるのだから）を越えて鳴沢  
側に向つて森林帯の急斜面を下つて行く。花手  
にはべたつと雪のついた猫の耳が面洋のオトギ  
の城廓の如くそびえてゐる。一昨日のトレース  
は雨のため跡片なく消え去つて、雪のくされ方  
は更にひどくなつてゐる。坪井、尾藤、木村、  
西川、実戸の順に降る。坪井は一昨日の偵察隊  
にこそ加つてゐないが、夏、秋の偵察に参加し  
てこのルートを切り開いた熟達者でもあるし、  
オーダーは別に決めてゐなかつた。このような  
腐れ雪と草つきのため、皆は慎重に一歩一歩足  
場を作つて降つて行く。高度のバランスを要求  
する岩と氷のコンビネーションの穂高の稜線よ  
りもかえつて神経を疲労させるということがつ  
くづくよくわかる。トップの坪井は自己の技術  
を信用してか、ともすればピツキを上げ、後の  
四人との向を隔ける。彼れがとある小ルンゼの  
トラバースを始めると思ふや、ざっーという音  
と共に姿を消してしまつた。「坪井、坪井」と

云う尾藤OBのドラ声か樹々に響いた。「おーい」と下から元気な声か返つて来た。草つきの上に薄くかぶつた雪に足をとられて転倒、ピッケルで制動をかけたながら十米ばかりスリップ、更に続く高ご十米位のオーバーハングの岩のため、体を中心に投出されてその岩の下で止つたらしい。四人は元気な声を確認してオーバーハングの岩を丘にまいていやな草つきを下降りし、奇蹟的に元気な姿を見てホットする。しかし、彼れのボツカしていた大半の食糧(食パン三十斤)とザイル二本はリック共そこから一直線をなして鳴沢大滝の上に落ちるルンゼを落ちていってしまった(以下棒沢と呼称)。しかもバウンドしながら落ちたため、そのトレースすら判然としない。我々はとり合えず周囲に残つていた眼鏡帽子等を拾つて、兎に角一旦正規のルートである我々の本端尾根と呼ぶ尾根に戻り鳴沢を下からつめてリックを捜すことに決めた。○晴鳴沢出合のC<sub>2</sub>予定地に到着することが出来た。しかし、

鳴沢大滝まで出合から予想外に遠いのと、C<sub>2</sub>に数百米登らなければならぬ負担を荷つた我々は充分な捜査も出来ず重い足をひきずつてC<sub>2</sub>に引上げた。(略図参照)

三月三十日(晴のち曇)

鳴沢大滝を登ることは非常に困難であること、昨日の捜査で悟り、昨夏からの偵察などで比較的にこの辺りの地理に明るい尾藤OB、安戸、坪井が空身で棒沢を降れるところまで降つていくことにし、木村、西川はC<sub>1</sub>にデポしてある食パン三十斤をとりに行く。食糧は例え失つても当座の食糧に困窮をきたすこともなかったが、篠田部長、新保先輩の心盡しのナイロンザイルは部として是が非でも発見しなければならぬ大切なものである。昨日のオーバーハングから下に、二つの滝がある。初めのはどうやら左岸をまいて降れるが、二番目の滝は2つに別れて、一は鳴沢大滝の下に、一つはその上に続き、どちらにも到底降りそうもない。岳樺に登つて下を

見ると大滝を音をなく幾條かの白糸のように水が流れその先は真暗なシユルンドの中に消え去っている。我々のリックもそのシユルンドの中に吸い込まれていったのではないのだらうか、それらしきものが見当らな。

三月三十一日（雪のち晴）

積雪が多いとリックの発見も殆んど不可能になるのではないかと気をもませたが、ほんの数輝で止んでほつとする。予定通りC<sub>3</sub>を設け、じっくりと腰を据えて搜索に当ることにする。坪井はリックがないためサブを使用した無理なパッキングのためか、又同じ場所でガソリン罐（約三升）を落す。これもリックと同じ運命をたどった。燃料はもはや数日の滞在しか我々に許してくれない。

四月一日（雨）

燃料を考えると一刻もじつとしていられないが、雪崩を警戒して停滯。

四月二日（曇りのち晴）

今朝までの間に新たなデブリが出た。こゝと思はれる所をシャベルで掘り返して見たが、小さなデブリとは云え、五人の人力と一個のシャベルではとても及ぶものではない。搜索を打切ることにする。一方、黒部の渡河工作も見切りをつけ撤収に五人の意見が一致する。

四月三日（晴のち曇）

C<sub>3</sub>まで撤収。

四月四日（風雪）

気温いらいしく下るが、燃料が豊富でない今では充分な保温も出来ない。

四月五日（快晴、風強くつめじし）

我々の遂に到達し得なかつた剣に雪煙が舞い上っている。B<sub>1</sub>に戻る。

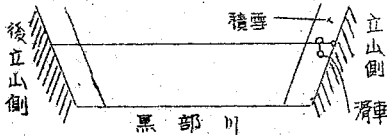
四月六日（快晴）

黒沢の管林署の小屋も同近かになると黒い土が、今まで両面に雪の壁をはり巡らしたように黒部生活、水の音と、雪崩の恐怖と、兵すれは我々を圧し去らうとする、過酷な大自然の中か

ら抜けだして、單調で長い竈川林道を歩いてい  
る。只の同じ大自然がこゝでは黒い土を現し、  
小鳥の声と溼い空気で微笑みかけている。もう  
大出のバスの停留所も同近かだ。

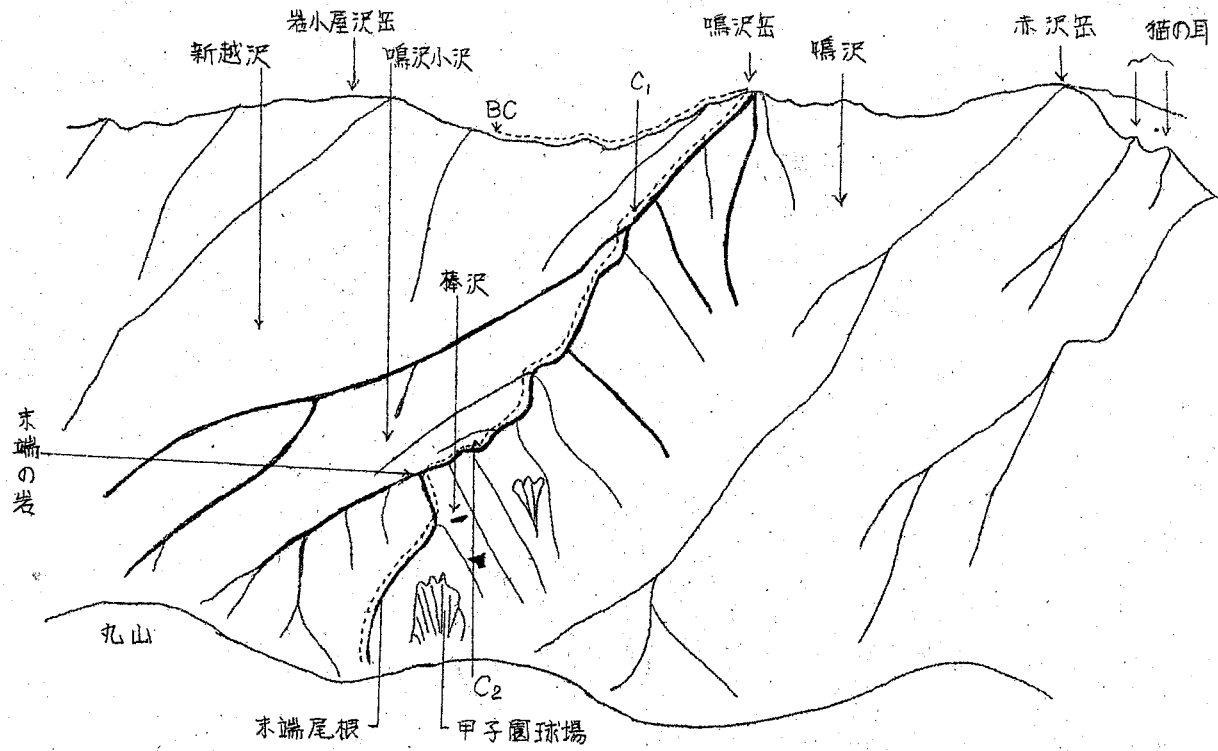
あとがき

春山に於ける失敗の原因としては、  
一、黒部横断点に於ける認識の不足である。我  
は鳴沢出合の吊越を唯一のものとして信賴し、  
他の横断の対策を講じなかつたのが大きな原因  
であつた。現実には吊越は予想外に  
多い雪のため（下図参照）使用不能  
だつた。立木を伐採して架橋するよ  
うな事は黒部のスヶールの前にはも  
ろくもつひえまつた。又、吊越も滑  
車がなければ絶対に渡れないことも  
今後のためにも強調して置きたい。  
黒部を（鳴沢出合で）横断するには  
吊越が必要な條件であらう。



オニには、リック（食パン三〇斤、ガイル二本）とガソリン罐を一人の隊員のスリッパによつて失つた点である。せめてガイルを二人で分担してホツカしてければ、事故後の捜索に於いて効果を上げ得た。しかし食糧に關しては、各隊部の都合でワポト隊とアタック隊に分けた変則的なローラー形式を取らざるを得なかつたためと、我々が始めて経験する長いローラーのため、あらゆる場合を想定し綿密な計画を樹てたので事なきを得た。

実際に鳴沢出合に立つて、一三〇。米という低い高度であるのに雪量の多いということに常念頭に入れて置かねばならない。それも後線に於けるような粉雪とか、クラストした雪と異つて、その雪は靴をすくすくにしてしまうような湿つた重い雪である。このような雪が不安定な場所に不安定に乗っている際のテクニクを熟知している必要があるのではないかと思はれる。

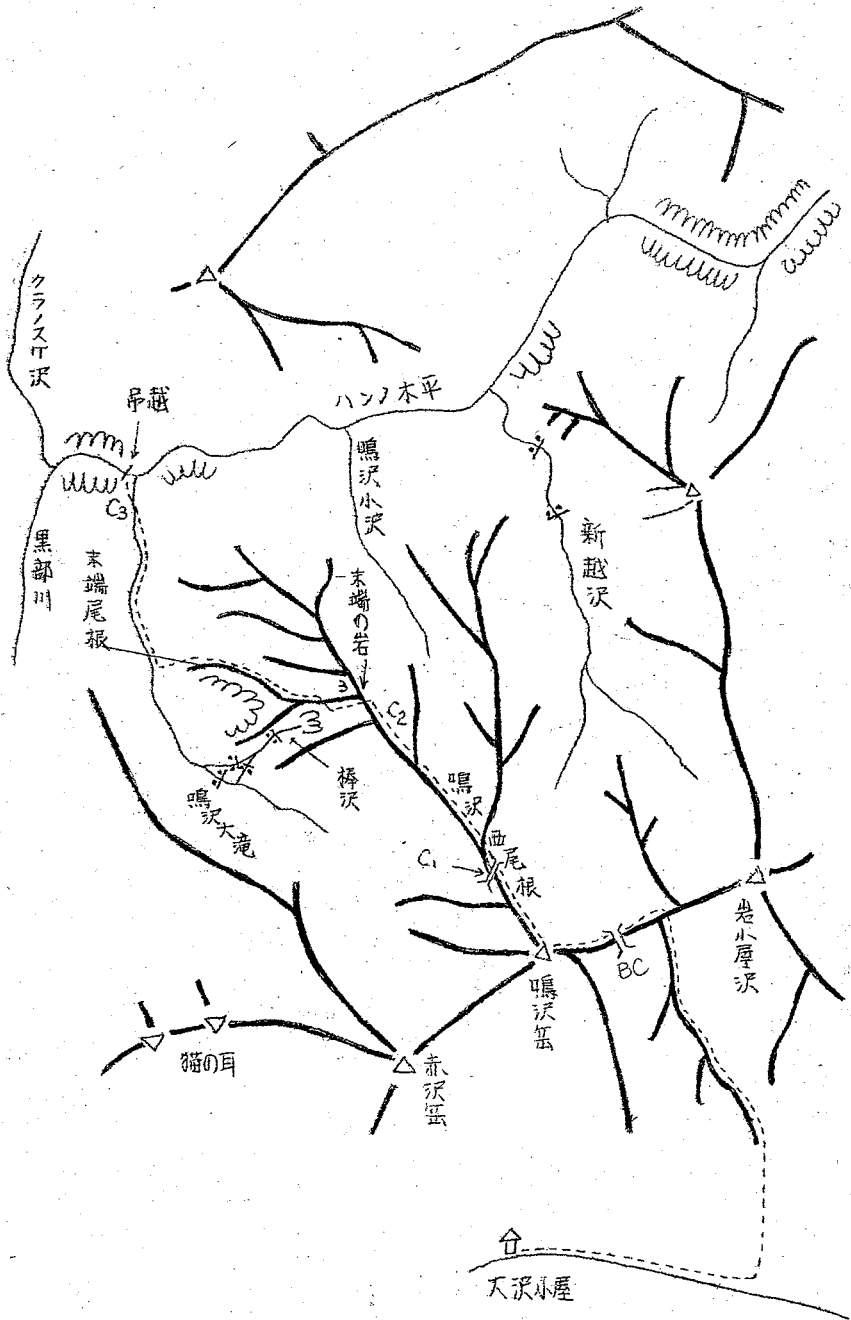


鳴沢西尾根略図

----- 春山トレース

1954.10. 真砂岳より

穴戸元



春山合宿行動表

大町 大出 寄沢 大沢 BH 新越乗越 BC 鳴沢尾根 (2350m) C<sub>1</sub> 鳴沢尾根 (1550m) C<sub>2</sub> 鳴沢出合 C<sub>3</sub> (ABC)

Ⅲ 18	7	扇					
19	7 5	2 2	扇 沢 下				
20	3	7					
21	1	2	停8				
22		11					BH設
23	2	2 9					BC設
24		6 4	停1	2			C <sub>1</sub> 復
25		5	停6				
26		10		3			
27	2	2		3 3	3		C <sub>3</sub> 復
28				停5	停6		
29		1 5			5		
30	6			2	3		
31					5		C <sub>3</sub> 設
Ⅳ 1						鳴 停5	
2						沢大 停5	
3						5	
4				停5			
5				5			
6		5					



# 春山食糧報告

木村裕一

食糧計画を進めて行く上の骨子を説明すると、大沢小屋までの朝夕の主食は米とし、一つのキヤムプ内の献立は煩雑を避ける爲に同一とした。しかし原料は同じでも要つたものが作れるから、少しも飽きることにはなかつた。晝食はフランスパン、ビスケット、タツキにチーズ、マーマレード、マーガリン、ジャムとバラエティを揃たしたのは成功だった。副食としては豚肉を毎日一人当り十匁を食することとし、野菜はキャベツ、ホーレン草、人参、ネギを配した。玉ねぎは高値なので中止した。

積雪期の食糧計画として本年度に特に取上げた問題は二つあった。一つはパツキングの完備と、停滞食の設定であつた。パツキングから報告すると、先づ段ボール箱とセメント袋とホリエチレンを用意した。そして各キヤムプ毎に食糧を包装した。そして一個の包装に出来ばいキヤムプのものは二つ又は三つに分けて重さの配分も考へた。セメント袋はC<sub>2</sub>までの食糧をつめ、それ以遠は停滞食と共に段ボールを使用した。又食パンはホリエチレンに包み、それをセメント袋につめて縄をかけた。そして各包装の表に〇〇用と明記して運搬の時に備えておいた。食パンの袋までもそうしたので荷上の際は仕度の出来次才、次のキヤムプの、更に次のキヤムプの食糧をスムーズに背負つて出かけることが出来た。今一つの利点は各キヤムプに於ける献立に飽きる頃には次のキヤムプを設営完了という事になつて、新しい献立にありついてそれが部員の士気にも影響をもたらしたという事である。勿論、計画を立てるに當つては、キヤムプが進むに従つて御馳走が出て来るようにする事も忘れなかつた。計画としては段ボールの大きさやその重量までも均一にし、昼食も一

食又は二食位を單位としてホリエチレンで包んで置かうとしたが實際的には不可能に近く、準備が煩雜になるばかりなので中止した。包装自体の効果としては食パンが薄片に切つてあつたに拘らずいつもよりも原型を保つていたし、しをれた野菜が消散するようになつたことがなく、包装の解りてないものはテントの外に放つておいても心配がいらなかつた。只パッキングをする爲には食糧計画を相当厳密に樹てなければならず、荷造りに想像外手数を要した。しかし一旦正確に樹てておき、包装の中に献立表と一人当り分量を書いて入れておくと、数パーティに分れた場合食糧係が居らなくても苦勞するようになつた。

最初の實施に當つて、段ボールの型により担ぎにくいのが出来たり、或部員のキスリングにしか入らないのがあつたという不手際やフランパンとホーレン草を同居させて、パンがくく

塩が不足し、C<sub>3</sub>の包装をバラして取出したといふこともあつた。未完成ではあるが包装を採りあげてみて感じたことは、運搬の爲の包装は完璧を期待することは出来ても、各部員の一日分を一單位としたりするようになつたことは経費が重なり、準備が煩雜になるばかりで、困難でもあり、又その必要もないと思へるのである。

次に停滯食についての報告。

今まで停滯日を見込んで献立は行動日と余り異なるところがなく、辛ひにして停滯日が少なくなつた時はそれを拵てて来るのは常だつたのを停滯食という新しい献立を作り、その口入をなぐし停滯日の慰安を出来るだけ多くしようと考へたのである。

先づ、停滯日四日(7)に対して二日は少くとも朝から行動することはないのであらうと想定し(完全停滯日)その日は二食とし、費用は行動日と同額又はそれを少し上廻る額とし、時間をかけてもよいから美味しい献立にした。こゝに

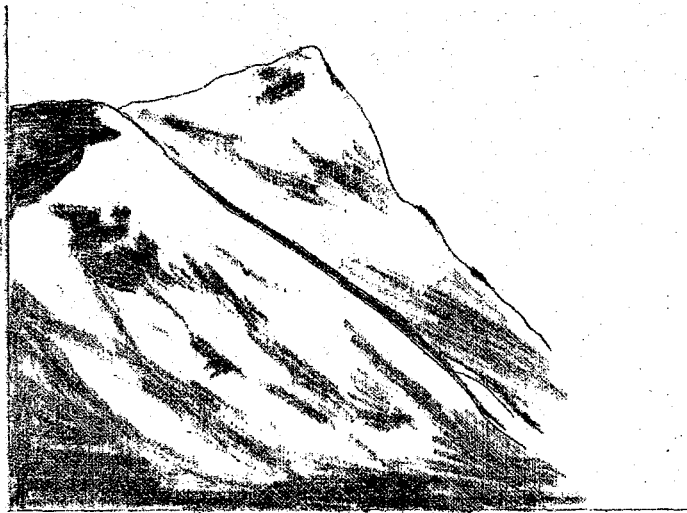
原料を上げると、乾うどん、中華そば、減しめん、粟おこし、羊羹、千ヨコレート、おみそ、ピーナツバター、豚肉、e.t.c. である。

二州をアタック隊二日分、サポート隊二日分をそれぞれパッキングした。これは部員を非常に楽しませ、期待を把かせて効果があつたようである。アタック隊の方は行動日でも消耗した日は中華そばをラードでいためて、土気の恢復に役立ったし、サポート隊は、下山一日前に一度に兩けて、大さねぎをしたとかいうことであつた。又アタック隊は嗜好品という意味で米を二升用意し、黒部の水で炊いて喰つた味は忘れられない。

今春山は喰つた者の感じとして大変せいたくをしたような気がするのであるが、これには菓子類を松屋町で、その他のものは天満の卸売市場を利用したのがあづかってたがあつたようである。

以上で散慢な報告であり、**春山食糧報告**

を経ります。最後にパッキングの費用として、荷に先輩から一軒四百円、新保のBからポリエチレンを三〇米頂きましたことにつき厚く御礼申し上げます。



# ◆ ナイロン二号テント 製作報告 ◆

昨年、ナイロン一号の使用の結果、ナイロンテントの優秀性が立証された。又春の剣征優等の大計画のホーラーの実施に当たつても是非ナイロンテントをもう一つ作りたいと考へていた所幸にも篠田先生よりナイロン生地、御提俵をうける事になつたので本式に作る事になつた。資金面は昨年同様先輩の御協力による事にし製作は同じく美津濃の新保先輩にお願ひした。

十一月頃より製作開始、支柱その他で色々新保さんに御迷惑をかけたがらも冬山直前に完成、すぐ冬山に使用したが何分生地、費用の面で制約があるため完全なものでなく、色々欠点も露呈したが全体として軽量、機動性の点で非常に優秀であり、アタック、縦走ではすばらしいと考へられ、之に更に内張、防水の強化等が

補へれば完全なものとなるだらう。

以下要点を報告する。

(1) 用途 最前線キャンプ用。

(2) 形 生地を量よりして三人用ミッド型張出し付に落ちついた。

(3) 生地 マオスル隊のテント地(黄色)ニーマール、ヤッケ用厚手(紺色)ニーマールを用ひ、壁、底は紺、入口と張出しは黄色を用ひたが色のバランス、強さ上のバランスは良かった。防水はシリコン防水、底だけでもビニールコートテッドすべきだ。

(4) 重量 テント支柱共五・五キログラム。

(5) 大きさ 入口の大きさは一辺一・五米の正三角形形。長さ一・八米。張出しは〇・六米。入口の長さは〇・九米。

(6) 支柱 一号と同様テント内側式にし、天井支柱は止め、二本組合せの交点は簡單なコンパス式にして突起に張線をかける様にした。支柱はトンギン。非常に簡單で能率よく

吹雪中でも二人で十分位で設置可能である。  
 支柱そのものはギョラにすべきで、つぎ目  
 は凍結に対しては更に研究すべきである。

(7) 入口 従来に比し非常に大きくし形を三角形  
 とし、中は二人並んですわれる様にした。

巾着式。出入にさいして非常に便利である。  
 (8) 張線 ナイロン張線。四隅の張線の内、中間  
 の高さのものは支柱がある以上不要であら  
 う。

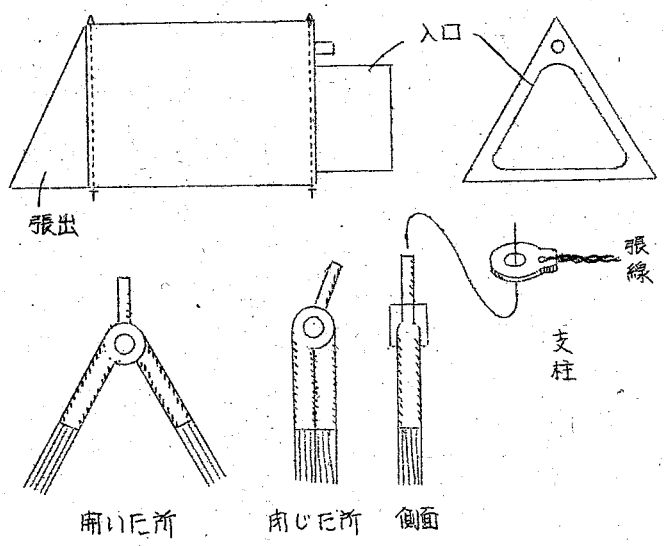
(9) 内張 費用の都合上今回はつけなかったが、  
 必ずつけるべきである。保温と同時に水蒸  
 気の再び結露して落下する害が余りにも大  
 である。

(10) 掃除窓 入口のそばに一尺平方のものをつけ  
 たが撤收時又掃に役立つ。

(11) ベンチレーションは入口の上のみにしたが、  
 両端にすべきだらう。

一般的に云って軽量で使い易い。殊に入口と  
 荷物用張出しは良かった。支点は生地の関係上

天候判断を誤り易い。又黄色の生地は本来ビニ  
 ールコーテッドすべきもので風が入る。内張り  
 はここにもつけるべきだ。  
 (坪 丹)



# 山行記録

一九五四・七）一九五五・六

○体育科剣登山応援（七月二六日）一八日）

松久先輩、木村、至中、

一六日（雨）美女平——地獄谷温泉

一七日（晴）地獄谷温泉——雷鳥沢——別山乗

越——劔往復——別山乗越小屋

一八日（晴）別山乗越小屋——池の平——阿曾

原——宇奈月

○夏山合宿（七月二〇日）二八日）

後立を知り盡した先輩も殆んど卒業してし

まった。現役の間に一度は後立の合宿生活を

するのも有益なことと考え前股合宿を計画し

た。なほ前股に關して詳しくは時報三号「南

股概説（大島輝天氏記）」を参照されたい。

宍戸（CL）、木村、広橋（念）、三枝、至

中、鷺沢（裝）、山本（食）、石沢、辻川

高木、岡田、村瀨、四方、寺田、佐谷、

大村（OB）、細見（OB、途中より）

二〇日（晴）

細野、丸山と兵衛氏宅で食糧、その他の

準備のち、黒菱まで上る。

二一日（晴）

唐松、旧発電所中継小屋跡に幕営、宍戸、

木村、広橋のルンゼまで前股への下降路偵

察に行く。

二二日（晴）

木村、至中、鷺沢、山本、関本を先登さ

せ、IⅡ峯間ルンゼの偵察、兼ボツカ。他

は唐松黒部側カールでグリセード練習のの

ち、同ルンゼより全員、唐松沢、不帰沢出

合のBCに入る。

二三日（晴）

三峯偵察、木村、山本。

二峯偵察、至中、鷺沢。

南港より前股取入口方面、大村（OB）、関本。

不帰キレットのデポよりホッカ、突戸他。

二四日(晴)

三峯Cアタツク。(初登攀) 木村、広橋。

二峯東南稜阪下ルート。李中、鷺沢。

唐松直掛直根。突戸、西川。

αルンゼ、関本、山本。

I II 峯岡ルンゼより白馬鍾行復。

大村(OB)、杉瀬、四方、佐谷、岡田、

寺田、三枝。

二五日(晴)

二峯東南稜阪下ルート。広橋、山本。

二峯ルンゼ1。鷺沢、関本。

南滝方面。木村、李中、四方。

αルンゼ。突戸、岡田、寺田。

eルンゼ。大村、村瀬、佐谷。

αルンゼ。西川、石沢、高木。

細見(OB)單身白馬よりαルンゼ經由BC入り。

二六日(カス)

南滝方面。木村、辻川、細見(OB)。

不帰沢、西川、三枝。

その他停滞。

二七日(雨)

停滞。

二八日(カスのち雨)

αルンゼ經由、唐松、八方尾根より細野

へ下山。合宿解散。

(突戸記)

〇黒部下廊下偵察行(七月三〇日)八月二日)

尾藤(上)、坪井、東、小澤、李中。

七月三〇日(雨)

大町(二、三〇〇)―冷澤中途の取入小舎(

一六、〇〇)

七月三一日(雨後曇)

取入小舎(九、〇〇)―冷池(二八、三〇)

八月一日(晴)

冷池(二〇、三〇)―棒小舎沢に下り立つ(

一五、〇〇)―底島槍沢出合より少し手前で幕

営(二八、三〇)

舟小舎より棒小舎沢に向つて下る踏跡を少し下ると、北圍にそれと分る小沢に出る。これは途中ニヶ所小滝を越え、更に末端の五米程の滝は石岸を伝つて容易に棒小舎沢に下り立つ事が出来た。此の辺りで既に棒小舎沢は広々とした河原になつて居た。

八月二日(晴)

テント(八三〇)―西沢小沢との出合(三〇〇)

広い河原を二、三度浅い渡渉をくり返し、牛首沢出合を過ぎると尙もなく急に河中が狭められる。右岸を伝つて行くと、行く手は、屏風の様に兩岸が流れて直角に立ち上り、だかり巾三米程の屏風の向に流れば狭められた。これが有名な滝だなど思つて右岸の屏風を本につかまり這ひ登つて向ふ側を覓下すと、なんと其処には閉電の立派な小舎を見付け全く驚いて了つた。午後盛んでしまふ。

八月三日(晴後雨)

棒小舎沢を下つてみたが、必死になつて下る気構へではなければ無意味だと分つた。京大磯坂氏等一行も十字峽から来られた。

八月四日(晴後曇)

キヤンプ(九三〇)―十字峽(四三〇)―

一五、三〇)―ハンノ木平(二九、三〇)

このコースで見ると言へば、先づ劔沢大滝の遠望、十字峽、出来れば棒小舎沢落口の滝、神タン及び其処へ下られた冠氏のルート、白龍峽、黒部別山沢、大へつり、下廊下唯一の渡渉点(黒部別山沢出合少し上手)、新越の壁及びその滝などが中心とならう。ソリ越ワイヤーは十字峽下手及び新越沢出合と鳴沢小沢出合との中間、それから鳴沢小沢出合、鳴沢出合とに在る。

八月五日(晴)

李中、先に下山。西名にて御前谷出合まで遊ぶ。

八月六日(晴)



昨日の散歩より、春の横断点として鳴沢出合を最も有刃とし、本日、尾藤、坪井は出合のツリ越を渡り鳴沢に入り、鳴沢岳より出て鳴沢右岸を繕してゐる尾根の末端（一八五〇米）まで登り、春の登降路としての偵察を行った。（九〇〇—一九〇〇）  
東、小沢は鳴沢大滝まで往復。

八月七日（晴）

尾藤、坪井は鳴沢小沢出合のツリ越を渡つて鳴沢小沢右岸の尾根の切崩きを二七〇〇米まで登る。東、小沢は内蔵助平往復（九〇〇—一八、〇〇）。

八月八日（晴）

大ダテがビンの中途（約一六〇〇米）まで登つて、鳴沢の右岸をなしてゐる鳴沢尾根及び鳴沢小沢の右岸をなしてゐる鳴沢小沢尾根を鳴沢岳よりその末端までを遠望して、その前者の方が容易である事も確めた。私達の偵察は先づツリ越のある場所、既に

鳴沢小沢出合及び鳴沢出合を春の横断点と想定した。が、夏処より内蔵助沢出合までの部分及びツリ越使用不能を考へると鳴沢出合の方が有利なので、一心鳴沢に下るルートを考へた。次に、鳴沢兩岸の尾根より鳴沢に下る斜面は、左岸の方が遙かに傾斜が少く、且つ左岸尾根末端の方が右岸尾根より高度が低いので極めて條件が良い訳なのだが、右岸尾根末端まで登つてみると、何とみ春の登降が出来るだらうといふことが分つた。所が主稜線よりの状態を遠望すると、左岸尾根は赤沢岳より出発するもので赤沢岳に近い部分は非常に傾斜が急で而も鳴沢右岸をなす鳴沢尾根より遙かに長いものであつた。恐らく春にはBCとなるであらう新越乗越の事を考へ合せると、一層鳴沢尾根の方が良いと言へよう。かくして此処に新越乗越より鳴沢岳に登り鳴沢尾根を下つて、その末端より急斜面を鳴沢に下り

その出合のツリ越を渡つて、立山側は内蔵  
助沢より内蔵助平に至るルートを考へた訳  
だった。

八月九日(雨) 休み。

八月一〇日(晴)

ハンノ木平(六、〇〇)―御山谷出合(八、  
〇〇)―一ノ越(二五、〇〇)―ミクリガ池(一  
六、〇〇)

八月一一日(晴)

富山に下山。

(尾藤記)

○後立山縦走(七月三〇日〜八月六日)

山本(七)、石沢、岡田、村瀬、四方、

三枝。

三〇日(曇りのち雨)

細野(九、〇〇)―黒菱小屋(二、四五)―

唐松小屋(二六、二五)

三一日(ガス午後雨)

唐松(八、〇〇)―白岳小屋(二、一〇)

一二時頃より小雨が降り出したため停滞。  
八月一日(晴午後ガス)

白岳(七、〇〇)―五竜頂上(八、二〇)―

キレット小屋(二、三〇)―鹿島槍釣屋根  
(二六、二五)

二日(晴夕方ガスタ立あり)

釣尾根(九、四〇)―南槍頂上(二〇、〇〇)―

冷小屋(二、四五)―種池小屋(二五、〇〇)

三日(晴午後ガス)

種池(七、〇〇)―鴨沢岳(二〇、〇〇)―赤沢

岳(二、二五)―スバリ岳北側のゴル(二、二

三〇)―スバリ岳(四、〇〇)―針ノ木岳(

一五、〇〇)―針ノ木峠(二五、三〇)―蓮華岳

(二四、三〇)

四日(晴のちガス)

蓮華(七、三〇)―北葛岳(二、〇〇)―船

窪小屋(二四、〇〇)

蓮華の下りけ下に行くほど、ガラガラで  
感じが悪くなる。最も下には、眞直な針金

かたらしてあるが利用法には少々首をひねる。北葺の上り以後、道は全く稜線通り正しく可成り急に上り下りして肩ともピークともつかぬものが次々に現れ、信州側からガスがたちこめて来て視界がさかす位置がはつきりしないまゝ中食をとる。七倉岳と船窪岳とのコルに船窪小屋あり。小屋から二、三〇〇米ばかり不動沢へ下ると岩の固から樋をひいた水場がある。小屋から更に十五分余り最低鞍部に到り、縦走路から直前にブツシユの中を北側へ十分ほど下ると汚れた小さい雪田があり、更に五十米ばかり下に僅かに砂の固から湧水あり。縦走路からは全くゆかない。狭い場所をならしつてやつとテントをける。

五日（晴東側ガス）

船窪（九・〇〇）—船窪岳（一〇・三〇）—不動岳（二四・〇〇）—扇沢岳（二六・〇〇）—烏帽子

四十八池（二六・三〇）

所々梯子や針金がつけてある可成り急な上り下りを繰返す中、不動沢の断崖に沿つていた道は次々に木立の固をゆるやかに縫う様になる。不動から先は東側のガスもはれて気楽に歩き、不動扇沢の固で長時間休憩する。

六日（曇のち晴）

烏帽子四十八池（七・〇〇）—烏帽子小屋（七・三〇）—葛温泉（一三・〇〇）

（三枚記）

○オニ次黒部下廊下偵察行

（一〇月一二日—二二日）

実戸（L）、佐谷、住吉（OB）

黒部を境野として立山側と後立側と二分して分担して看山の偵察を行うことに決し、その立山側の偵察のため内蔵之助沢を下る。

一〇月一二日 大阪発。

一〇月一三日（雨のち曇）

新設成つた立山ケーブルに乗って藤橋から美女平に九分で到着。建設中の自動車道路を弘法にむかう。弘法を過ぎE道りから新雪が積っている。大日、立山が真白に白つてゐる。ラジウスを持つて未だかつたのが惜まれる。追分小屋泊り。

一四日（晴）

新雪が照りかゞやき実にきれいだ。天狗平では最早スキー可能である。積雪が多ければ偵察も断念しなければならぬ。地獄谷に泊り空身で雪高沢を登ることに計画を変更す。

一五日（晴）

四時起床。再び計画を変え、別山乗越小屋泊りの予定で出発。正午に到着。乗越は剣沢から風がすき抜けて、まだ寒さにならぬ。二日ない皮膚に恐ろしく寒く感ぜられる。午後から佐谷をキーパーにして、突戸、在

吉(OB)で真砂岳まで内蔵之助平上部の偵察を行う。内蔵之助平、後立は、全然雪はなく、木立が紅と黄色に包まれている。予定通り内蔵之助平にけることにする。

一六日（晴）

剣沢はクレパスの上によく新雪がつもつてその在りかをわからなくしてしまつてゐるので非常に危険だ。アン・ガイルンしてコンティニアスで下る。真砂沢合で、積雪圏から急に紅葉にうつるのが興味深い。ハシゴ段乗越を経て内蔵之助平につく。

一七日（曇）

前日遅く着いたので、朝麻坊。午後九山側に若干登り、内蔵之助平を一望に収める。

一八日（曇）

内蔵之助沢を下り、御山谷小屋に行く。閑豊の小屋番に珍客とばかり歓迎をうける。

一九日（晴）

岩魚を釣つて御馳走からの言葉に甘え

一日休養をとる。夜の岩魚の塩焼きは実に  
うまい。

二〇日(曇り一時雨)

平、針の本谷を遡り針の木小屋にとまる。

二一日(曇)

大町に下山。

(実産記)

○才三次黒部偵察(一〇・二五)一・三

坪井(シ) 西川、戸井、田島(OB)

黒部以東鳴沢西尾根偵察の尾鳴沢岳よ

り黒部鳴沢出合迄下りて見た。

一〇月二五日 大阪発

一〇月二六日 晴

大町(三・三〇)―白沢出合(七・〇〇)

一〇月二七日 晴

白沢(八・〇〇)―崩沢(二〇・〇〇)―大沢小

舎(二・三〇)―針之木小舎(六・〇〇)

一〇月二八日 晴后曇

「坪井、西川」針之木小舎(八・〇〇)―

針之木岳(九・三〇)―鳴沢岳(三・〇〇)―鳴

沢尾根(二・三〇〇米(四・〇〇))。田島、戸井

「針之木小舎(九・〇〇)―平小舎(五・〇〇)

荷物が多いので二隊に分ける。稜線に雪

はない。鳴沢頂上より這松の大本の中を苦

勞して下りる。夜半より雪。

一〇月二九日 晴

「坪井、西川」出発(八・〇〇)―ハンの本

平(七・〇〇)。田島、戸井「平小舎(九・〇〇)

―御山谷小舎(二〇・三〇)午后ハンの本平往復

昨夜の新雪約二寸。新雪に滑りながら森

林中を下降、別に岩場もなにもない細いが

なるい尾根である。一八〇〇米附近で夏の

ナタ目発見、ガイテングラードにかゝって

から意外に手取り、タヤミの中をツリ越

を渡る。小舎は屋根全部はづしてあった。

一〇月三〇日 曇后雨後雪

「坪井、西川」ハンの本(七・〇〇)―御山

谷(九・〇〇) 田島隊と合流

坪井、西川、田島再びハンノ不往復、夕刻より風雪となる。

一月三十一日 雪

御山谷(三〇〇)―平小倉(三三〇)

吹雪のため一ノ越をやのガラ峠を越える事に決め、平へ移動。積雪約一尺。

一月一日 晴

平(六〇〇)―刈苣峠―ガラ峠(二〇〇)

―立山温泉(四〇〇)

刈苣・ガラ両道悪く雪二尺、久し振りのラッセルに大いに苦しむ。ガラ峠三尺。西を見て不ツとした。

一月二日 雨曇

立山温泉(八〇〇)―富山。

一月三日 大阪着。

(坪井記)

○雪彦山(一月三日)―七日)

奎中(七)、立花、岡田、大西。

三日 大阪―姫路―山之内―雪彦山。

四日 地藏谷、洞ヶ谷。

五日 三峰。立花帰る。

六日 雪彦山―七西米峠。奎中帰る。

七日 峠―上小田―峰山高原―曉晴山

―太田池―菊小田―寺前―大阪。

(岡田記)

○木曾駒(一月四日)―八日)

宍戸(七)、石沢、村瀬、片山、郊外者

二名。

四日 大阪発。

五日 上松―金懸小屋。

六日 金懸小屋―頂上宮田小屋。

七日 頂上附近の慢歩。村瀬他一名帰る。

八日 頂上附近は風雪。千疊敷カールを経て飯田線宮田に下山。

飯田線宮田に下山。

○御在所山(一月七日)―八日)

高木、椎木。

七日 湿の山―御在所三角点―武平峠

―鎌ヶ岳頂上―武平峠―山の家。

八日 山の家—武平峠—雨乞—杉峠

—根の平峠—朝明溪谷—温の山。

(高木記)

○ハツ岳(一月二〇日—二五日)

玄橋、辻川、岡田、久保(〇B)、住吉(〇B)

山本(〇B)、部外番一名

二〇日 大阪登。

二一日 松原湖駅—松原湖—稻子小屋—

本沢温泉。

二二日 本沢温泉—夏沢峠—硫黄岳—

赤岳—本沢温泉。

二三日 本沢温泉—夏沢峠—東天狗岳—

茨の湯。

二四日 茨の湯—笹原—茅野—奈良井

—鳥井峠—奈良井。

二五日 大阪着。

本沢温泉の手前から雪が見え始めた。夏

沢峠からアイゼンをつけだが、快晴で風も

無く稜線の上においても積雪は三〇〜四〇

程度で、その上ラッセルがしてあったの

で眺望も十分楽しみなが、快適な山行が出

来た。

○鹿島槍東尾根冬山縦察(二月二三日—二五日)

坪井(一)、三枝。

二二日 大阪登(二・三・一〇)

二三日 大町—源汲—鹿島—大川沢出

合—小冷沢出合(二〇・四五)

二四日 小冷沢出合(八・二〇)—高千穂平(

一・三〇)—爺子岳北ピーク(二四・三〇)—

西沢出合(二六・二〇)—キヤマフサイト(七〇)

東尾根へのとりつきを観察しながら大冷

沢を越る。東尾根のスケツチをしたり写真

をとったりしつゝ、ナガガク尾根を登る。

二五日(小雨) 小止みの跡を見計って東尾根

を一四〇〇米辺りまで登ってみる。一時半

頃帰途につく。大町登にて帰阪。

(三枝記)

○大峯山(二月一日)〜(二日)

岡田、池田名

一日 大阪港―吉野山上駅

二日 百丁茶屋―山上テラス―柏木―

大阪

(岡田記)

○冬山合宿

◇鹿島穂兼尾根合宿(本文参照のこと)

◇関温泉スキー合宿

尖戸(上)、細見(下)、石沢、辻川、

村瀬、岡田、青田、四方、宇井、高木、

加藤(OB)、大島(OB)、部外者六名。

スキー練習に一本を傾け、雪中露営等の

他の登山技術の訓練は春山にゆずるといふ

方針のもとに新人部員のスキー合宿を居住

性のよい一般旅館に合宿を求めたわけであ

る。

二五日 関温泉着。午後平地滑走練習と緩傾

斜滑降。

二六日 ヤブの中の登降、横滑り、全副動斜

滑走。

二七日 直滑降、横すべり、クラゲターン

二八日 前日の繰返し。

二九日 永倉往復。

三〇日 総復習、合宿解散。

三一日 大島(OB)、尖戸、石沢を除いて帰阪

又は細野にむかう。

(尖戸記)

○関温泉残留組(二月三日)〜(二月二日)

大島(OB)、尖戸、石沢、

○細野スキー行(二月三日)〜(二月四日)

加藤(OB)、細見(OB)、辻川、四方、木

村、山本、

○菅平スキー行(一月三日)〜(七日) 尖戸、

○越畑スキー行(一月五日)〜(一六日)

加藤(OB)、細見(OB)、宮本(OB)、由井

浜(OB)、尖戸、石沢、三枝。

○伊吹山(一月一六日) 尾藤。



○伊吹山(二月三〇日) 宍戸、石沢、山本、

○蘇武岳(二月二〇日) 宍戸、

○木曾御岳(二月二四日) (二七日)

辻川、石沢。

二四日 大阪発(一七・三〇)

二五日(晴)

木曾福壽(七・〇〇) | 羽入(八・三〇) | 五

合目千本松小屋(二六・〇〇)

二六日(快晴)

小屋(八・〇〇) | 中ノ小屋(九・〇〇) |

一ノ又小屋(二〇・三〇) | 八合目半のスキ

デホ(二・三・三〇) | 剣峯頂上(三・〇〇) | 中

ノ小屋(二七・三〇) | 千本松小屋(九・三〇)

二七日(曇のち雨)

小屋発(一・三・三〇)

○六甲地獄谷(三月一〇日) 岡田、

○比良山(三月一三日) 岡田他三名。

○香山合宿(本文参照)

○木曾駒ヶ岳(四月二九日) (五月五日)

至中、鷺沢、岡田。

四月二九日 大阪発(二三・三〇)

四月三〇日(晴后曇)

上松(九・四〇) | 一・三・三〇 | 五合目小屋(

一七・〇〇)

五月一日(雨后晴)

小屋発(二・四〇) | 上松頂上小屋(八・五〇)

五月二日(晴后曇)

小屋発(二・三・〇五) | 駒岳(二・二・〇〇) | 中

岳 | 千疊敷ホテル(二四・三〇)

五月三日(ガス | 風雪 | ガス)

前夜ツエルトを縫って、空木岳へ縦足す

べく三時に起床し待期すれどガス晴れず。

小屋発(七・三・三〇) | 室駒岳(九・〇・〇〇) |

小屋帰着(九・四・〇〇)

五月四日(雨)

天候悪く空しく中御所道を下山す。

小屋発(二・〇・〇〇) | 駒ヶ根橋(二五・四・〇〇)

| 赤穂駅(一七・〇・〇〇)

五月五日 犬吠着

○北岳（四月二十九日）～五月五日）

細見（OB）、辻川、四方、石沢、小坂田。

二十九日（晴） 甲府―夜叉神峠―鮎差

三〇日（晴） 鮎差―荒川小屋、同小屋より

池山中池まで荷上げ

五月一日（雨のち晴） 小屋巻（二六〇〇）―

池山中池（二七〇〇）

二日（暗のちガス） テント―二九〇〇米

のピーク

三日（ガス・雪・雨） 停滞

四日（雨のち晴） テント―荒川小屋

五日（晴） 小屋（八・三〇）―夜叉神峠（二・

〇〇）―甲府

○中山（五月十四日） 岡田。

○鈴鹿霊仙山（六月四日）～五日） 岡田池。



# 集 会 記 録

六月三日

○後立山について（穴子）

○夏山合宿南股に決定

六月三日

○春山準備リーダー会

六月十日

○御在所山報告（鷺沢）

○夏山検討

○総合打合

六月一七日

○南股について（大島OB）

六月二〇日 才六回總會

○会長挨拶 ○OB挨拶（加藤OB） ○昨年一度一

般報告（昨年度川島リーダー北海道赴任のた

め欠席、山本OB報告） ○会計報告（代理・

広橋） ○装備報告（代理・穴子） ○二九

年度役員決定（会長藤田先生、リーダー宍戸、

尾藤、坪井、木村、至中、広橋、東）○二

九年度計画 ○新入紹介 ○親談会

六月二四日

○JAC集会に於ける新保OBの講演をきくため

休会

七月一日

○夏山準備会

七月八日

○夏山準備会

七月十五日

○夏山準備会

八月二六日 リーダー会

○黒部の偵察結果（坪井）

○冬・春山について

九月四日 夏山報告会

○夏山合宿報告（宍戸他）

○黒部の偵察行報告（尾藤）

○後立山縦走報告（三枝）

九月九日

○冬・春山相談会

九月一六日

○スキー合宿について

九月二三日 リーダー会

○冬山 ○スキー合宿

九月三〇日 学期試験のため休会

十月七日 学期試験のための休会

十月八日

○秋山準備会（宍戸）

十月一四日

○ナイロントメント製作に関して（坪井）

十月二一日

○オ三次黒部偵察隊準備会（坪井）

○鳴沢吊越に關して

十月二八日

○オ二次黒部偵察の簡單な報告（宍戸）

○春山について（宍戸）

十一月一一日 秋山報告会

- 才三次黒部偵察（坪井）
- 雪彦山（岡田）
- 御在所山（高木）
- 木曾駒（穴戸）
- 一一月一九日
- 春山・冬山の計画（穴戸）
- スキー映画より（細見）
- 一一月二五日
- 才三次黒部偵察、木曾駒山行のスライド供覧
- 一一月二日
- 雪崩について（穴戸）
- スキー合宿開温泉に決定
- 東尾根偵察報告（坪井）
- 一一月九日
- 冬山準備会
- 一一月一六日
- 冬山とスキーの個人装備について
- スキー合宿日程発表
- 一一月二二日
- 冬山準備会
- 一九五五年一月一三日
- 冬山報告会（スキー合宿・穴戸、尚会計報告  
・石沢、東尾根行動概略・坪井、同食糧報告  
・山本（運）、同装備報告・岡本）
- ナイロント2号について（坪井）
- 一月二〇日
- 春山計画
- 一月二七日
- 才一回春山討議
- 二月三日
- 二月一〇日 } 学年試験のための休会
- 二月一七日
- ナイロンガイルについて（先生）
- 富士山遭難について（大島OB）
- 二月二四日
- 黒部横断を大沢小屋を附にして剣までのポー  
ラー形式の往復計画に変更することについて
- 三月三日

○春山討議

三月一〇日

○春山準備会

◎ 一九五五年度

四月一四日

○春山報告会(行動概要・実戸、食糧・会計報

告・木村、裝備報告・西川、予越並むにアク

シデントについて・実戸)

四月二一日

○本年度役員決定(リーダー木村、実戸、李中、

山本、岡本、西川、鷺沢)

四月二一日 リーダー会

○事務分掌を決定

○本年度の方針について

四月二八日

○五月山行準備会

五月一二日

○五月山行報告(木曾駒・李中、北岳、石沢)

五月一九日

○夏山計画

五月二六日

○冬山、春山について



# 編集後記

◇編集者の不手際のためオVII号の発行の遅れたことを深くお詫びします。

◇創刊以来引続き、巻頭言は篠田先生に御執筆願って、それが今回、マ丁スル登山隊々員に選ばれた徳永先輩に御多忙のところを特に御無理願いました。

◇今年度は大量の卒業生を出したため、昨年の華々しさはないが、我々の一年間の努力を認めていたと喜ばたい。

◇会員名簿はⅧ号の名簿をもとにして校正に修正を繰り返しましたが、記載もれ、住所変更、その他間違ひがありましたら至急御連絡下さい。

(S)

昭和三十一年一月

大阪大学山岳会「時報」オVII号

(非賣品)

発行所

大阪市北区常安町  
大阪大学学生部内

大阪大学山岳会

編集責任者

突 戸 元

印刷所

大阪大学自治会内  
プリント部



會員名簿

一九五五年一月二日現在

會長

藤田軍治

大阪市都島区東野田九丁目 阪大工学部内  
豊中市麻田九七

精密工学科教授

先輩

和田豊種

医明32

在イラン

小次基次

医昭3

大阪市阿部野区王子町 南校職員寮

阪大才二解剖教授

水野祥太郎

医5

大阪市阿部野区 大阪市立医大病院内

市大整形外科教授

国屋勇吉

医

茨木市仲之町

南業

小林義郎

医9

兵庫県印南郡船形村

南業

坂谷信次

医14

神戸市東灘区住吉駅前(北側)

南業

河原信二

医14

豊中市原田一・二・三

国立大阪病院外科

新谷五郎

医14

豊中市本通り三丁目五

泉佐野病院長

小沢淳二

医14

日本生命查査課

阪大才一病理講師

酒井英之

医15

池田病院外科医長

阪大整形外科

瀧一郎

医16

面宮市今津水渡町一七(渡米中)

遷信病院耳鼻喉科

岡崎晃

医16

貝塚市堀一九一

帝國産業厚生病院外科

恩知裕

医18

大阪府北河内郡寝屋川町平地

阪大産婦人科

反田洋一

医22

尼崎市南明町一ノ一三

阪大才三内科

大久保克己

医23

大阪市西區新町通り二丁目四六

阪大才三内科

伊藤俊天

医23

大阪市西區新町通り二丁目四六

阪大才三内科

山林一

医24

大阪市西區新町通り二丁目四六

阪大才三内科

堺	細見	加藤	大島	棚山	塩野	高倉	塩野	赤松	新保	国府	関	山口	水野	岩永	小沢	東	尾藤	住吉	家田	松久	徳永	小川	吉川	渡辺
弘	一仁	幹太	輝夫	俊樹	喜久夫	蓬雄	良之助	二郎	正樹	雄二郎	集三	省太郎	健次郎	剛	運夫	雍	昭二	仙也	千尋	博	篤司	彌栄	定範	修治
理化28	理生28	理生27	理化27	理化23	理化23	物理21	理化20	理化16	理化15	理化15	理化13	理化13	理化11	医30	医30	医30	医30	医29	医28	医26	医26	医25	医25	医25
大阪市西成区玉出本通り一ノ一〇	大阪市福島区上福島南二丁目(福島六四〇八)	大阪府豊能郡箕面町桜井(桜井二五八)	神戸市東灘区御影町平野一五(御影三八〇八)	尼崎市潮江住宅四〇一	神戸市東灘区住吉町新堂四三(御影二二六九)	神戸市垂水区面垂水町一六四	神戸市東灘区住吉新堂四五(渡英中)	面宮市仁川町一ノ七七	面宮市松籬莊九〇	芦屋市三條南町九三	芦屋市月若町七三	芦屋市三條町九二	芦屋市三條町六三	宝塚市武庫山一四	芦屋市三條通六七(芦屋四五四七)	大阪府阿部野区阪南町中六丁目一六	大阪府泉北郡信太村聖ヶ岡	面宮市羽衣町九七(西宮三二一六)	伊丹市伊丹 弓場病院内(伊丹二二)	大阪市南区挑谷町一五	大阪市東淀川区十三東之町(豊崎二〇二九)	大阪市都島区毛馬町一五四	布津市長田	大阪府豊能郡箕面町平尾七二〇
	阪大歯学部	阪大理学部本城研	大塚が入中央研究所		阪大理学部渡瀬研	阪大理学部	醸造科学研究所	美津濃技術研究所	阪大理学部仁田研助教	阪大理学部伊藤研	美津濃技術研究所	阪大理学部渡瀬研	阪大理学部	美津濃副社長	インターン	インターン	インターン	インターン	神戶医大解剖学教室	阪大産婦人科	阪大才一内科	阪大才一外科	阪大才二外科	阪大才二外科



大村 一生	豐中市岡町南五丁目三二 (豐中三〇九〇)	阪大理学部大学院(浅田研)
川口 俊治	豐中市新免六二二 (豐中三一七八)	KK大阪ホイヤ製作用
山口 次郎		阪大工学部電気科教授
仙波 正	岐阜市加納朝日町三丁目	仙波能率事務所
武田 正幸	京都市伏見区深草飯倉田町府宮住宅一六	東海棧工KK
村上 龍郎	堺市北旅籠町東一丁二五 (堺九〇四)	明光精棧製作所代表者
高島 幸男	姫路市綱千区新在家九四〇	日セウ綱千工場
香藤 俊貞	尼崎市富田園和一ノ三一	大阪鍛造KK
池田 滋		日立製作所鑄造部
梶原 信男	京都府乙訓郡長岡町蒲田下町 (神足一一六)	日本郵船大阪支店工務課長
吉見 俊一		いすゞ自動車KK 川崎工場
河原 日章		
池宮 清二郎	西宮市高木石沢町三三一面龍莊	田村香料KK
田村 禎造	大阪市東淀川区三國町一二二三 (三國五四九)	福井精鍊KK
黒川 誠一		昭和産業
坂上 秀夫	芦屋市大榎町七八四 (芦屋四三二六)	関西電力近畿支店工務部業務課
遠藤 常忠	大阪市阿部野区山坂面之町三二二	航空庁調査課
大沢 信一	東京都杉並区車田町二ノ一五〇	日本純良薬品KK
福田 正治	京都市左京区粟田口真屋町四七 (吉田三二一六)	荒川林産化学工業KK
吉田 達三	芦屋市打出小槌 (芦屋四五一八)	汎建製作所
川村 宏	豐中市内田二五〇 (豐中五六三)	京神急行車輛部才一技術課技術係長
五歩 一純郎	西宮市鳴尾町平町四八	東芝KK 検査技術課
西原 清美		福島市労働基準監督所
盛岡 英治郎		門司市国鉄監理局棧橋課長
池田 泰雄		
野崎 善藏	東京都杉並区成京三ノ四九四	

砂越 竹夫	工化16	山口県岩国市	興亜石油KK 製油課長
奥村 正己	工化16	兵庫県加古郡加古川町蒲之一二二ノ三七五	神戸工業大久保工場
佐野 糾正	工電16	大阪市阿部野区橋明通一ノ七九 (天下茶屋五七七六)	大阪中央放送局増設送所
大島 直義	工船16	豊中市岡町	
乾 晶弘	工化17	布衣市長堂三丁目二	乾貴金屬化工KK
京極 与寿郎	工化17	大阪市住吉区田辺東之町六一ノ一七	阪大工学部応化助教
松本 裕太郎	工化17		阪大工学部応化助手
春木 静男	工化18	東京都品川区大井南原町一二八二	保安隊統監部補給課
岡三 大郎	工精19	神戸市長田区尻池町六ノ七三一二	川崎製鉄計量器工場
村田 良二郎	工電20		
田中 行雄	工精21	大阪府藤屋川市字香里 千歳荘	大阪市大理工学部機械
久保 三朗	工機24	大阪市南区北桃谷町一八 (南七九〇)	住友金屬工業KK
西宮 誠裕	工船28	大阪市阿部野区相生通三丁目一五 (天下茶屋二九五六)	
川島 勇	工機29	北海道空知郡赤平町 住友赤平警察寮	住友石炭KK
宮本 貞雄	工通29	尼崎市武庫之莊四丁目三〇	早川電気KK
近 璋三	工精29	大阪市阿部野区天王寺町二六二八	阪大工学部大学院
二本 節夫	工通29	尼崎市潮江グセノ寺	川崎飛行機岐阜製作所
田島 汎	工通28	芦屋市宮川町一三 (芦屋二二一〇)	住友金屬KK
山本 光二	法29	芦屋市大原町九五 (芦屋三六二九)	大和銀行三宮支店
土屋 直	工通29	芦屋市楠町五七 (芦屋三六四八)	住友金屬KK 和歌山製作所
梶 忠男	工通29	大阪市旭区大宮西之町一丁目四一	田辺製薬
三枝 礼子	工通29	東京都都区赤坂町福吉一ノ四九	日本衛材
井上 一枝	工通30	神戸市東灘区御影町一里塚一〇九三	阪大薬学部大学院
由比 哲也	工通30	面宮市今津町六石角一八四五	豊中一中教官
瓜橋 茂経	工通30	面宮市末広町五	面宮市役所

現役

本村 裕一  
坪井 至之助  
林 伸一  
実産 元  
片山 徹  
奎中 勝  
鷺沢 忍  
立花 直治  
鳴海 淑雄  
西川 元夫  
戸开 祥夫  
村瀬 泰弘  
石澤 命久  
山本 進一郎  
岡本 靖治  
高木 俊夫  
四方 大中  
岡田 博司  
佐谷 稔  
椎木 二郎  
弄田 満州朗  
辻川 眞

大阪市城東区枚出町三五六  
布施市稲田一六一四 (布施二一九)  
神戸市灘区森後町一〇二  
面多市松籬荘二五  
大阪府住吉区墨江中三丁目四八 滝山豊方  
愛媛県八幡浜市川名津  
枚方市阪大工学部内 学生寮  
枚方市阪大工学部内 学生寮  
神戸市生田区中山手通り七丁目八  
芦屋市打出翠ヶ丘町五三  
大阪市東淀川区下新庄町二ノ五四  
吹田市南泉町二六三五  
西宮市松籬荘二一三  
豊中市本町七丁目二四の二 (豊中三三七一)  
大阪府豊能郡箕面町箕面八六三  
和歌山市石浜町二六〇  
堺市上芝町四丁目  
大阪市阿部野区阪南町番三ノ五九  
吹田市千里山一八九  
大阪市東住吉区平野柴町三ノ一一  
堺市柳之町二二  
吹田市重水二八五  
大阪市阿部野区阿部野筋三ノ一五 (77 一七三一)


経済学部 四年  
医学部 四年(六)  
医学部 四年(六)  
医学部 三年(五)  
医学部 三年(五)  
工学部(造船) 四年  
工学部(機械) 四年  
工学部(精密) 四年  
工学部(冶金) 四年  
工学部(電気) 三年  
工学部(応化) 三年  
工学部(応化) 二年  
工学部(応化) 三年(五)  
理学部(物理) 四年  
理学部(物理) 四年  
理学部(化学) 四年  
法学部 二年  
法学部 二年  
医学部 二年  
工学部(精密) 三年  
経済学部 三年

本年度新入部員

山田 良平  
飯田 稔  
松本 保枝  
桶下 重彦  
大井 孝和  
森川 和子  
一山 幸代  
乾 正

大阪市阿部野区王子町三丁目一三 (66 三一六六)  
大阪府北河内郡田家町北條五八〇  
大阪市阿部野区三明町二ノ三 (77 二七三四)  
大阪府枚岡市上六万井出堂丹七七  
大阪府豊能郡箕面町百楽荘三二一七  
池田市清寿美町五三〇  
豊中市下丹内一九一八  
大阪府南河内郡石町軒三


医学部	一年(南校)
医学部	一年(北校)
文学部	四年
工学部(通信)	二年
工学部	一年(北校)
理学部	二年(北校)
文学部	二年(北校)
医学部	一年(南校)



安くて。美味しい

# 医学部食堂

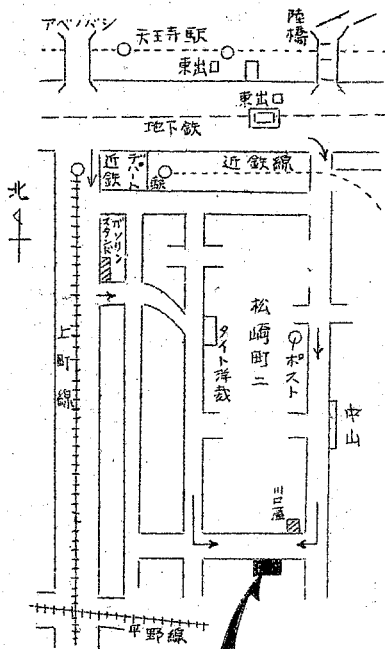
阪大医学部記念館一階



大正九年より 伝統のある

吉田屋の

山靴 スキー靴

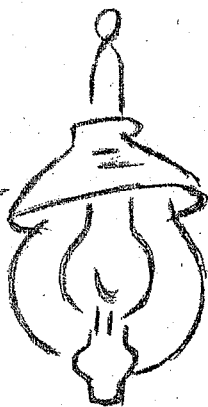


吉田屋株式会社

大阪市阿部野区松崎町二丁目三八番地

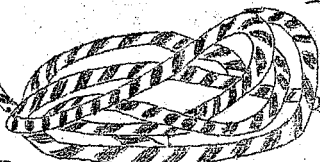
電話 天王寺 (77) 九五四一 番

都心にある山川屋  
山へ行く人々の相談所  
北口山岳スキー研究所



ま、とにかくい  
らとてみて下さ  
い。  
そろいふ店なん  
でウチは親身にな  
てといふのがモット  
御満足得られるで  
せうキット。

大阪市北区絹笠町十一  
(堂ビル裏・回生病院北側)  
電話 ③4 3240

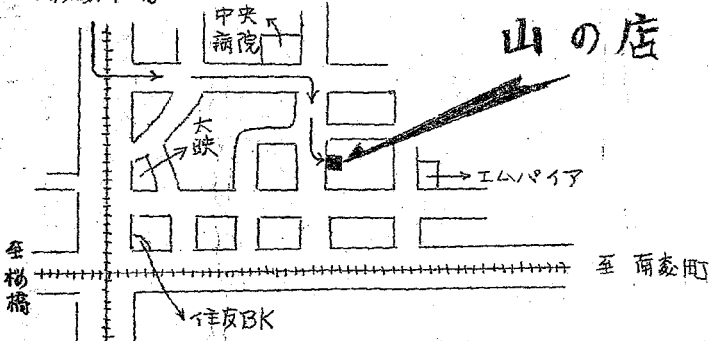


# スキーと冬山装備

冬山用具    ピッケル・アイゼン・オーバシューズ  
 ワカン・オーバズボン 等

スキー用具    国産スキー    西沢 金田  
 新輸入品    スキー各種  
 その他 多数取そろえております

大阪駅・阪急



# 山の店

大阪市北区曾根崎上一・二四  
 TEL. ③④ 4192  
 ミヨ, ヨイクニ

滑り易い……上達の早い  
1956

易い。

スキー

ベルグ印



日本一  
スポーツの

美津濃

本店…大阪 芝屋橋 一東京 麹一 小川 町